

地域と農業

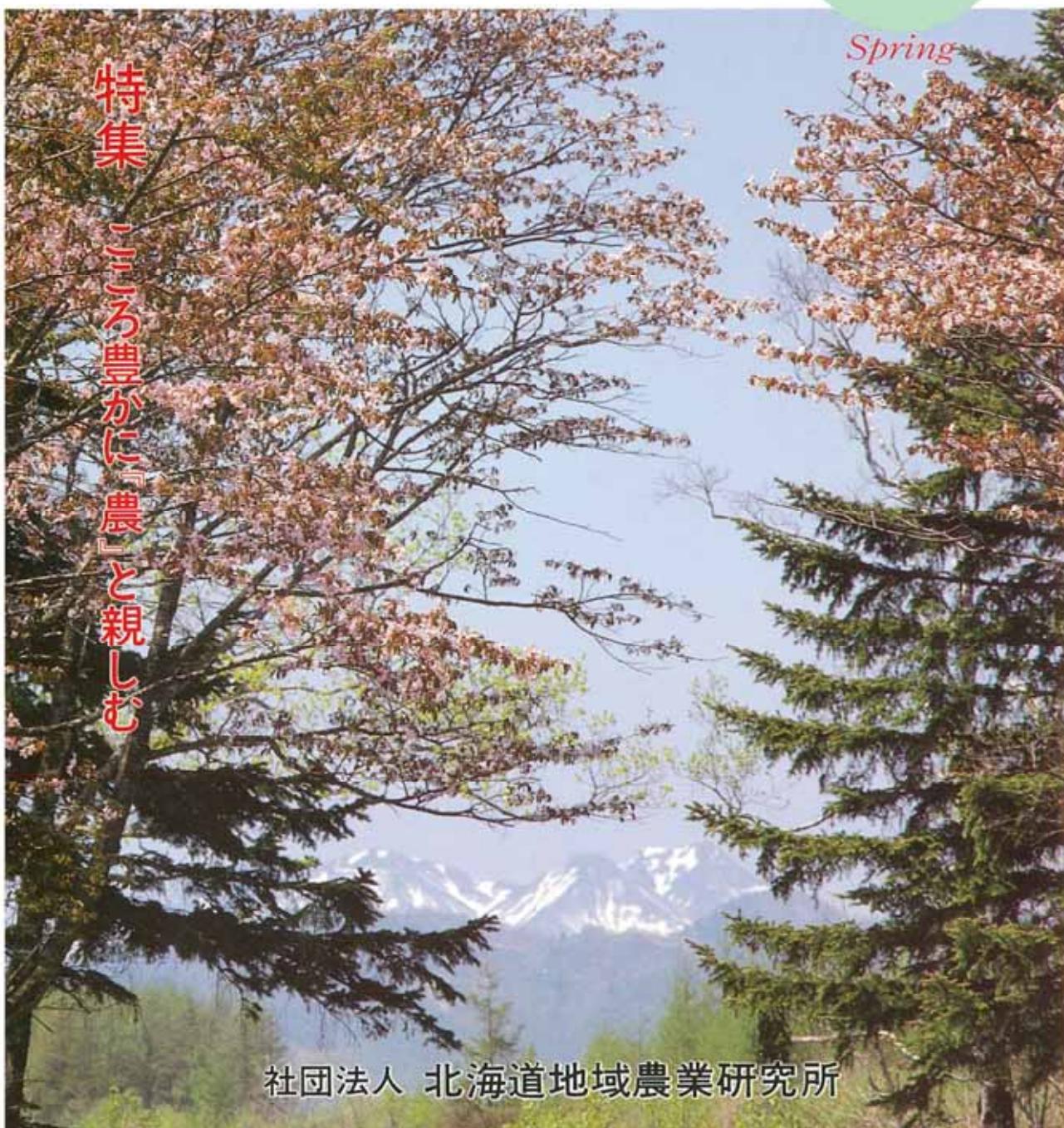
会報

第 17 号

May. 1995

Spring

特集 ～ころ豊かに「農」と親しむ





霧多布湿原センター



函館市北方民族資料館



岩見沢市郷土科学館



北の大地で芽をだし20年、
今では大地にしつかり根をはり
大きく広がった幹をもつ企業へと育ちました。
北海道で生まれ、北海道で育った私たち、
これからも北海道の歴史と人と未来を見つめつづける
企業でありたいと考えます。

歴史と人と未来を結んで

おもな業務内容

- 博物館・資料館など展示施設の設計・施工
- パンフレット・カタログなど印刷物の企画・制作
- 映像やコンピュータ装置による観光案内施設
- 看板・標示板などのサイン計画

）gb 株式会社 現代ビューロー

GENDAI BUREAU CO.,LTD.
〒060 札幌市中央区北2条西3丁目 札幌第1ビル7F
TEL 011-231-6049 FAX 011-222-6149

地域と農業

VOL. 17

— 目 次 —

表紙写真 =根室の5月=
撮影者 =谷口雅之



2	観 察	緊急にして永遠の課題－人材の育成 研究所長 七戸 長生
4	特 集	こころ豊かに『農』と親しむ 入植10年 喜怒哀楽 北檜山町 大津 美保子
9		一握の土塊（つちくれ）に、夢を託して 常呂町 小野寺 俊幸
16		子供と花に囲まれて「農」に生き甲斐を求めつづけたい 知内町 大嶋 真砂子
20		ハーブを導入して心豊かな農家生活を持続する 東川町 中田 正俊
24		－新規就農24年目－ 「花のある暮らし」を夢みて 旭川市 上村 美智子
36	Essay	ブラジルアマゾン農協調査 北海道大学 大学院 田中 規子
42	連載 No.3	あのマチ・このムラ地域おこし活躍中 ＝豊富町・美瑛町の事例＝ 専任研究員 河村 彰仁
46	解 説	=講演= 「酪農の経営問題」 酪農家（中標津町農業協同組合長）三友 盛行
55	ときの話題	オウム真理教騒動の背景 北海道立中央農業試験場 経営部長 長尾 正克
59		掲示板
60		お知らせ・DATA FILE・編集後記

緊急にして永遠の課題——人材の育成

研究所長 七 戸 長 生

周知のように北海道農業は、稻作、畑作、酪農・畜産の三本柱の上に成り立っているが、そのいずれもが本年度からよいよ本格化するガット・ウルグアイ・ラウンドの農業合意に基づく自由化の進展によつて、全く予断を許さぬ局面を迎えることになった。端的にいえば、道産品は販路を失つてしまふのではないかという不安が濃厚である。そのため、何とかしてその打撃を軽減できないか、そのための有効な施策を早急に講じてほしいということになると出されていく。しかし率直に言つて、事態は極めて深刻であつて、從来通りの受け身の姿勢では存亡の危機に瀕しているといわざるをえない。

そこで腹をくくつてよく考えてみれば、自由化が進むからといって北海道農業の産業としての基盤、とりわけ重要な農地という資源基盤が崩壊したり、枯渇したりするわけでは決してない。また、この農地を使って生産される農畜産物に対する需要が消滅したわけでもない。世界中からさまざまな農畜産物を大量に引き寄せるほどの旺盛な購買市場が存在しているからである。もしそうだとすると、問題は、このかけがえのない北海道の農地資源を有効・適切に利用して、この旺盛な消費力を持つた購買市場に向けて、その一コースに適合した農畜産物を供給できるように、既存の農業の生産から消費に至る全過程の、どこを、どのように變

革していくか、といふ点にかかっている。これが、産業としての北海道農業の生き残りの基本線となるう。幸いにして北海道の農地の多くは、碁盤の目のような区画になつてあり、土地基盤もかなり整備されている。また近年の輸送網の整備ぶりも目覚ましいものがある。したがつて生産から消費に至る全過程を思い切つて合理化していくに不足しているのは唯一点、資源と市場を結びつける産業活動の中心的な担い手となる人材の養成と組織化の問題である。

もともと北海道の農家は、府県の農家に比べて経営規模が大きく、企業的性質が強い専業農家層によつて占められている。しかしながら今後の農業の担い手となるべき人材の養成・確保という点では、零細で自給的な性格が強く極端に兼業化が進んでいる府県農業のそれと大差がなかつた。むづむづりイ工を単位にして「親父の背中」で教育するといふ古めかしい在り方が踏襲されてきたのであつた。これでは、前述のような重大な時機に際しても、守りの姿勢を脱することができないのも無理からぬことであろう。同時に、このような旧来の人材養成の在り方が、いかに現代の産業社会に

適合していないかは、到る所で現れている後継者不足、担い手老齢化の動向に如実に示されているといつよい。

もしそうだとしたら、いま最も急がなければならぬのは、今後の地域農業の中心的な担い手となる人材の養成・確保とその組織化に着手することである。そのためには広く地域農業を見渡して、その生産から消費に至る全過程の変革を押し進めていく担い手として若者達を位置づけ、高度の農業技術の学習はもとより、各種の組織的な活動を積み重ねて近代的な経営能力を鍛磨することが重要である。農業合意関連対策大綱として相当額の予算が計上されているが、そのうちのかなりの部分が集中的に投入されるべきであるのは、まさにこのような地域農業を中心的に担う人材の養成・確保と組織化に関連する部分でなければなるまい。

近年、地域農業の振興計画に関連する「一ースガ大いに高まつて、私達の研究所も大車輪で協力しているが、実はその究極の課題も、地元の関係機関ならびに担い手農業者的人材養成と組織化をいかに進めるかという一点に集約されるのである。

こころ豊かに『農』と親しむ

昨今、世の中は戦慄をおぼえるような大事故や大事件が続発し、心の安逸感が脅かされています。「農」についても、厳しさだけが声高に喧伝されることも世情の上では当然とも思われます。しかし、このような時代だからこそ日々の営みに心のゆとりを涵

養し、明日へ向けての夢を育てていくことが大切に思われます。それぞれの環境や事情を克服しながら、前向きに活躍されている農業者の方々が数多くおられます。本号では、そうした方々の中から北海道内各地、各層の皆様の生き方をご紹介します。（編集部）

入植十年 喜怒哀楽

北檜山町丹羽 大津 美保子

(1)

今春から、三番目が小学校一年生です。姉一人と通います。片道を五キロ、自転車と徒步通学は、子供たちを大きく、元気に育てくれます。やはり、一番上の子は大変でした。一年間一人で通つたのですから。

四番目を保育所に車で送つてから、一歳の子を連れて牛舎へ行きます。一歳になつたばかりの娘、歩くのが楽しそうです。自分の履いている靴が珍しくて、前に進ま

ないのでですが。

雪が融けて、「忙しい忙しい」と、ぼやかないで、今吹く風や、すきとある青い空、そして、この草木の新芽の香りやささやきを、春の感覚を、軀全体で感じとりたいと思いません。

十年前の六月、開発公社の斡旋により、この北檜山の地に入植しました。当時、子供は生後八ヶ月の娘一人でした。娘が四歳になつて、保育所に入



大津 美保子（おおつ みほこ）さん

1978年宮城県立農業短期大学畜産科卒業。同年、園芸関連の企業に就職したが、北の自然へのつよい思いから退職をし、79年酪農実習生として渡道、上川町で酪農の実践を体験する。1982年短大の同級生だった良夫さんと「牧場結婚式」を挙げる。1985年北海道農業開発公社の農場リース事業によって北檜山町に新規就農で入植。当初は7頭の牛飼いから出発する。

現在は21haの土地に乳牛40頭（うち搾乳牛25頭）を飼育する酪農をご主人と共に営む。

5人のお子さんの育児と合わせて、ボランティア活動やミニコミ紙「モー・モー・メッセージ」、家族新聞「丹羽MESSAGE」の編集、発刊など盈利と活躍中のヤングミセス。

（お住まい：瀬棚郡北檜山町丹羽451）

るまでも、私は話をする友達はできませんでした。子供を通しての友達は、話題も共通性があり、楽しいものだと思いました。

そして、この時、私は思いました。子供は私にとって、なんてはないものだと。辛い時、失敗した時、子供たちは私達夫婦をあげまし、明るさを分けてくれました。子供た年に感謝していました。

これからは、何があつても子供たちの為に考へようと思いました。それは、子供たちを過保護にするのではなく、大自然の中で、農業を通して、共に生きていくといふことです。自分たちの考へや智慧を教え、体験を伝え、文通や奉仕活動なども、一緒に続けていくことです。そして、自立への力を導いてやることだと思いました。

(2)

年一回は、両方の親が、東北からの遊びに来てくれます。短期間の休日を利用して来るのだから、ゆっくりと過ごして行ってほしいと思ひます。しかし、実父や義母は、草じみや畠仕事を忙しく動き廻り、

家の周りをきれいにしてくれます。子守りを頼む実田は四～五年前までは、こんなことをよく言われました。

「こんな小さな子供は、牛舎の手伝いをさせるなんて、かあいそうだ」と。

でも、毎年来るたび、子供たちの成長をみた実田は、私達の気持ちをわかつてくれたみたいです。

今では、実田のほうから、「牛舎へ行く時間だよ。頑張つとじで」。

子供たるに声を掛けてくれます。子供たちの牛舎での手伝いは、哺乳と草やりです。休んだり、仔牛は腹をすかせて啼いてしまいます。

そして、お父さんの仕事が増えて時間もかかるでしょう。

四歳、六歳、八歳、十歳の子供たち四人で話し合って、作業を分担したり、別の手伝いもします。

この名は、一人づつ次々と風を

ひき、元気な子供が牛舎へ手伝いに行きました。十歳がスキーで右手首を折って、ギフスをしました。が、左手で十分に手伝いはできません。怪我は怖いですが、姉弟の

思いやり、協力など、また一つ人の勉強になつたのです。

悪いほうに考えず、良いほうに考えて、何ひとつでも学びたがるものです。

農家でしかできないお手伝いは、子供たちを自立に導く、絶好のチャンスです。

「何んで、牛飼いが好きになつたのも」。

なんて、文句のしごりを聞いて、お手伝いをいやがる時もあります。宿題がありたり、口記に時間がかかりたり、マンガを見たり、時間厳守は大切なことですが、子供たちは任せた以上、あまり口出しせず待つことにしました。

塾や習い事は一つもせず、テレビやテレビゲームをつけない我が家、ささやかな楽しみなのですから。

四歳・「やや、牛舎へ行く時間じゃないの」。
六歳・「いや、いつもは、もう少し遅いよ」。

八歳・「だって、哺乳する仔牛はなるもの」。

十歳・「哺乳して牛も少ないんだも」。
四歳・「の、わんたね。少し休めるね」。

へ行かないとい、変な気分」と、旦迷惑っています。

牛舎のお手伝いを、毎日の習慣にしてしまへと、やのなこと気が済まないなるのです。

去年は、七月から十一月まで、分娩がありました。お父さんが出かけて、帰りの遅いあるの方。

子供たるの会話です。

毎年子供たちを連れて、東北の実家へ帰ります。六歳は、実家に牛がないので不思議がります。八歳は、「牛舎に行く時間だなあと、時計を見ます。十歳は「牛舎

當が成り立てば、金銭的な資本はしだくあります。それより、心と時間のゆとりが、今、一番ほしいともいわ。子供たとの時間は、あとで取り戻すことはできません。単身赴任の長かった父を思つて、家族一緒にこられる農業は、あ

がれでした。

私は、牛乳が大好きです。搾りたての牛乳が、毎日飲めて、親や友人にも分けてあげられることは、最高の喜びです。

四歳は、姉の友達が来ると決まつて言います。

「うちのお父さんが搾った牛乳なんだよ」。
六歳は、牛乳が飲みたくなると、「お父さんの搾った牛乳、ちょっといいね」と、叫びます。

「買つた牛乳なんて、家にはないのにね」。
と、皆んな、笑います。

手作りのバター やチーズ、ヨーグルトを使って、お菓子を作つていると、家族や友人の笑顔が浮かびます。皆さんに差し入れることも楽しみの一つです。
酪農家ならではの醍醐味です。

(4)

牛はもちろん、犬や猫、うさぎや鶏のたくさん動物達は、私たちの家族です。子供の成長に伴つて、もつと家族を増やしたいと思います。

写真は▶

左から舞さん

(10歳、スキーで怪我をして風邪もひいています)

京ちゃん(4歳)、

将くん(6歳)、琴ちゃん(8歳)、

あゆみちゃん(11ヶ月)。

大津さんの可愛いお子様たちです。



「」は、季節保育所で、一ヶ月

物が、自然です。

もで休みです。今は、山でスキーやりますが、とにかく牛舎へ行つて、動物達との触れ合う時間は長いのです。六歳は、あきれる程の動物好きで、雪の中、牛舎で抱き合つてころがるのです。それが、一人の挨拶になつてゐるようです。

お父さんも、搾乳は、猫や鶏を肩に乗せて、何やら話をしながら始めます。

私も、何回田力の産後、マターティーブルで気が減入り、その時、牛舎へ足を運びました。牛舎へ顔を出すだけで、動物を見るだけで、気持ちが落ち着き、はげまるのです。

ネ「をなでたり、イスを散歩に連れていくだけで、血圧が下がつたり、精神が安定したりするそうです。動物との触れ合いもまた、私達を育ってくれ、心を豊かにしてくれようのです。

我が家は、小さな田から五キロも離れた山奥にあるので、子供たちは、毎日友達と遊ぶわけにはいきません。遊び相手は、姉弟力動

に書けるので、返事が来ると子供も喜びます。

特に、私のベンツレンジは高齢者が多くて、相手の方も、私の便りを心待ちにしてくれました。年がすばらしく、が見えてきました。そんなゆとりも、てきてきたのでしょうか。

牛飼いを始めて、まだ十年ですが、すばらしく、が見えてきました。そんなゆとりも、てきてきたのでしょうか。

子育てをするには最高の環境です。搾りたての牛乳が飲めます。そして、動物と共に暮らせるのです。

好きで始めた牛飼いなのに、辛いと思った」ともたくさんあります。それを逆に、自分の武器にしていきたいのです。そして、ストレスを上手に解消して、楽しく生きていたのです。

入植当初は、知った人のいない土地で、淋しくてよく泣いたものです。赤ん坊をおぶつて、上の子の手を引いて牛舎へ行く、夢を追う夫は、とても輝いてみえたもののです。

「」で、私は友達がほしいと思いつきました。手紙を書いて、外に出なくて、もたくわんの友達ができません。遊び相手は、姉弟力動

ラントイフも考えました。しかし

聞いたり読んだりの情報は、自らが体験したことには及びません。

そこで行動を起すことにしました。それが、子連れの老人ホーム慰問と、「モー・モー・メッセージ」の新聞です。

義父の一回忌で、夫が八日に帰つて、近所のあじさん朝の搾乳だけ手伝つてやひました。その日、札幌に出かけるひでの「牛臭くせ」と「めんね」と、叫び、「おじさんは、牛乳臭くなつただけだ、気にしないよ」。

と、白い歯を見せて笑つてくれました。四十年以上の牛飼い人生のおじさんからは、やつと学ぶべきことがあります。

そして、自らが作り出す自由な時間がもてる農業だからできることだと思います。

地位やお金などほしいと思いません。もつと、大自然の中で、子供たちと生活してくるからです。誰でもそう思うはずです。

今の私達に感謝し、そのお返しを、社会奉仕としたいのです。そして、今の幸せを、他のたくさんの人々にも分けてあげる為、我が家に招待をしたいと思っています。

十年の間に、五人の子供を出産し、なかなか出かけることが難しく、牛舎と家の往復の日々が続きました。世間とのつながりもなく不安に思つていました。

新聞、雑誌に投稿が始まり、ボ



モー・モー・メッセージ



1995・3 No.19

「どうですか　牛の看板」

—他の農家からも制作依頼も—

村上 経子著

牛舎やサイロが点在する高台、通称「ガンビ岳」の中腹にある一軒の酪農家の牛舎の正面に、人目をひくホルスタインの看板がある。これは瀬棚町の村上信夫さんの妻、経子さん(36)の作品だ。経子さんは、特別絵の勉強はやっていたわけではなかった。

たまたま酪農実習先で見たプロが書いた看板を自分の家にもと、十年ほど前からかきだしたという。最初は鉄板に書いていたが、アメリカで見た牛舎の壁に張っていた看板を参考に、一頭の牛を縦九十㌢、横百二十のコンパネにベンキでかく方法にした。この看板が好評で、「今まで五～六軒の農家に依頼されて作りました。中には共進会に入賞した自慢の牛の斑紋で制作したこともあるって、その時は喜ばれました」と経子さんはうれしそうに話す。

看板を作るコツは「顔や目はもちろんですが、特に肢蹄の立体感、全体の遠近感を出すこと」という。「看板をかくことは趣味の一つですが、いろいろな趣味を通して、牛・酪農について語り合う機会が増えることはうれしいことです。酪農情勢が厳しいのは肌でひしむと感じていますが、焦らず、あきらめず、看板に負けない牛・牧場作りを進めていきたいね」と熱っぽく話す。

[この原稿は瀬棚町村上経子さんが「畜農新聞」に掲載されたものを複製したものです]

ひと足早い春

大津美保子

1. 福寿草が・・・

雪どけ水が・・・

雪がとけて土が・・・

それよりも、もっと早く

春を感じることができる

もしかしたら、それが

私の最高の喜びかもしれない。

2. 春の風が・・・

もうカレンダーの上では・・・

陽が長くて・・・

そんな事より、もっと早く

春を感じ事ができる

もしかしたら、北海道に住んでいる

者の特権かもしれない。

それが便りの中の春

道外からの便り、そして便りの終わりに

あと少しで、北海道も春になるよ

がんばれ。

それが便りの中の春

耳で聞いた春

目の不自由なペンフレンドから

これは確かな春。

家の回りは一メートルの積雪

鶯のなれない鳴き声

まだ外は冬のたたずまい

まだスキーシーズンだというのに

花壇の土もみえない

ジャンパーはぬげないので

だけど、私の心は

だけど、私の耳は

ひと足早い春。

ひと足早い春。

「一握の土塊(つちくれ)に、夢を託して」

常呂町 福山 小野寺 俊幸

土は、微生物。つまり「いのち」のかたまりだ。その「いのち」の営みの力をいただいて、私たちは、更なる「いのち」を、産み出す、育む。風土に、土に、活かされながら生きていく「農」の暮らし。

いま、私たちは活かされていることに、もつと謙虚に向き合うことを忘れてはいないだろうか。

そしてその中で、私の「いのち」を活かしていくにはならないのではないか。

土地に暮らす。「縁があつての大地、風土との出会い。どういうふうに私たちは向き合ってきたのか、まだ向き合あうとしているのか。私たちの大地、常呂の地域に生まれた、豊かな「農の風」が織りなす暮らしをお話する中で考えてみたい。

物語が始まつた

『風のがっこう』誕生*



小野寺 俊幸(おのでら としゆき)さん

J A ところ理事・風のがっこう代表

畑作・野菜経営

(お住まい: 常呂郡常呂町福山354番地

T E L : 0152-56-2450

F A X : 0152-56-2420)

常呂町福山地区。常呂町市街地から常呂川沿いに14キロほど内陸に入った純農村地区。「十一世帯八十九人が暮らす町内でいちばん小さな行政区」でもある。平成三年は春。児童数の減少により、地域住民の心のよりどころとなっていた町立福山小学校が、平成四年三月末で休校となることが決定、七十有余年の歴史に終止符を打つこととなつた。

福山小学校は、児童數十人にも満たない小さな学校だった。しか

し、子供たちは、豊かな自然の中で、はつらつと学校生活を送っていた。先生たちは、子供たちを野山に連れ、自然という文字のない教科書から、いのちのこと、優しさとうれしさ、愛するということ、を、人として大切なことを、教えてきました。

平成四年六月、休校となつた町立福山小学校を舞台に、地域の人たち自らの手による「地域共育」の場、「風のがっこう」が誕生した。

地域住民の高齢化、学生の町外流失、地域交流の職業化、人的交流の行政等への依存をはじめ、地域を取り囲む定番的ともいえる課題に対して、地域は、あまりにも受け身となつていているケースが多くみられる。

人がいきいき元気になる。基礎生活圏である地域が明るくならなければ、結果として住みよい町にはならないのではないだろうか。地域生活者が、地域に生きる自信、誇りを暮らしの中から取り戻していくことが大切なことではないだろうか。「風のがっこ」は、地域生活の中心であった校舎を、学校という制度化された「教育の場」から自発的意思に基づいた、開かれだ「共育の場」として地域で再生していく試みだ。

区民の集い、講演会の他、大学との提携を図り地域住民が教壇に立ち、地域が育んできた農村文化を伝えるセミナーの開催。手作りカヌー、女性フォーラム、大学生を中心とした「学農」ファーム、他府県の子供たちとの交流をはじめ、地域間・世代間交流が、農村の持つ心地よいリズムを大切にしながら、私にとって、家族にとって、地域にとっての「学びの場」づくりが、多彩なプログラムとして展開されている。

「風のがっこ」は、休校となつた福山小学校に新しい「いのちの風」を吹き込んだ。「風のがっこ」は、人と人との平らな心の関わりを中心に据え、評価とか効率にとらわれない地域の息づかいが伝わる豊かな「学びの場」として開かれている。そして、関わる一人ひとりが主人公といふ、この「学びの場」を通して生まれるひとつひとつの体験が、地域生活者としての自らを高め、地域に暮らす自信を生み出す元気の素になつてゐる。

一楽しいこと、気持ちのいいことは、足元にあります。地域の生活の中に価値を見出していくこと、また、価値を引き出していくことが大切です。

農村社会、地域の抱えている課題は山積している。しかし、そのことに背を向けるのではなく、しつかり目を、心を開き、立ち向かっていきたい。

人々が、地域で生きようとするとき必要なことは「学ぶ場」なの

▼「風のがっこ」—— 農を語る ——

風のがっこ 校長 小松 光一氏



であつて「学校」ではないのだ。いま、「風のがつ」が、問い合わせているものは、地域に暮らす人々が、豊かな風土に育まれ、また、よき出会いの縁に紡がれ、いきいき元気に「いのち輝く」地域の暮らしを築いていくための自立プロジェクトとしての「地域共育力」を、地域の中でのより高めていくかといふことだ。

* 胎動～動きだす

「農」の人々*

「風のがつ」の心根が、静かに、しかし、熱く「農」にまつわる人々の心を揺り動かし、人が地域が動きはじめた。そして、農協も、行政も。

平成六年四月、福山地区、自給肥料供給センター「福山夢工房」が誕生した。全町のし尿を安全、無臭の液体肥料にする施設で能力は、全国一を誇る。

「福山夢工房」という名前のように、建物は中世の館のようないやれたりへくなつてあり、まだ、福山地区を夢のある農村文化地区

に、との構想も生まれ、地域住民との積極的意見交換の中から施設周辺の公園化はもちろのこと、バキュー車も外観からはそれとわかるらしい農村景観にマッチした特別仕様車だ。

これは「風のがつ」が育んだ「田舎」の延長上に生まれたものだと考えている。

農村に嫁いだ非農家出身の主婦の団には、農村の暮らしはどう映っているのか。農村のありかたを考える女性「オーラ」、「さくら」、「風のがつ」の心根が、静かに、しかし、熱く「農」にまつわる動きを始めている。

いま彼女たちは、「女たちの飛行船」プロジェクトに取り組んでい

る。

また、常呂町最大の農業集落「岐阜」地区も動き始めた。平成七年二月、「岐阜フォーラム・春」を開催。更には、常呂川沿いに広がる「豊川」・「共立」の二地区は、今年開拓百年を迎えるにあたり、旧川沿地区として四年振りに両地

区合同での夏「心の風・大地に舞う川沿フォーラム」101を開催、新たなる一世紀を模索する。

「農」の人たちはたくましい。しつかりと大地に根をはるように動き始めた。笑顔と開かれだ心を持つて。いままことにとは違う、未来を拓ぐ温かく力強い「光」を感じられる。とにかく元気なのだ。

点が生まれ、点が繋がり、支え合へ、広げる、深まる、といふことが自然な形で展開している。これは、謙虚に、力まず、人が土地と風土に学んでいるから生まれてきたことにほかならない。風土に人が輝くとは、人と人が支え合い、人ととの関係を地域のもつリズムの中で認め合い、受け入れ、育んでいるからだろう。厳しい自然の中で暮らす「土」の人人が培ってきた知恵のなせる技なのかもしない。

* 「ひしさ」を、尊重する暮らしづくり*



▲「福山夢工房」全景

これまでの価値観レベルをいま一度見つめなおしていかなくてはいけないのではないだろうか。今後、地域において展開される様々なプロジェクトについて、発想段階から大きく転換していくかなくてはならないと考えている。

これまでの価値観レベルをいま一度見つめなおしていかなくてはいけないのでないだろうか。今後、地域において展開される様々なプロジェクトについて、発想段階から大きく転換していくかなくてはならないと考えている。

め、受入れ、育んでいくこと。地域に暮らす一人ひとりのあり様、個性を大切にすることに他ならない。

言葉を換えて表現すれば、「何ちらしさ」を暮らしの中で育んでいくのではないだろうか。

例えば「消費者」と「生活者」という振るがな視点。これは不自然だ。ベースツツな部分、関わりが欠落している。地域生活者としてお互いが繋がっていかなくては、そこに豊かな「いのち」のやどりどりは生まれてこない。消費者、生産者であるのではなく、共に時代を生きる地域生活者であるといふ、基本の関わりを見失つてしまい。上下ではない、平らな関わり。そこには、人が、地域が輝くのだから。

リサイクルを考える。消費者は、生産者でもある。消費したものに新たな、更なる「いのち」を与える。リサイクルの「いのち」がふくらむように押し出してやる生産者もある。平らな関わりが、あ

互いを認め合うこと、「繋がり」「いのち」をリサイクルしていくこと。この視点が豊かに生まれるし、あるいは生活のレベルで繋がつていけると思う。

では、「らしさ」を何かの学べばよいのだらうか。基本的には、「いのち」をどうに置くか、価値観の主軸をどこに置くかが、問題なのだろうが、構えず、風土から、土壤から、暮らしの中で自然に学べばいいのではないか。例えば、麦をつくるパンを、うどんを作る。

乳をしぼるバターやチーズを作る。野菜をつくるジースを作れる。農村の持つ「らしさ」のひとつだ。

「就農」と「修農」のシステムづくり

しかし、農村の近代化の中で、行く先がみえないからなのか。

このような営みは、マイナスの価値観としてとらえられ、都市と同じ「豊かさ」を享受しようという代償の中で、失われてきた心の部分だ。

を育む「らしさ」が失われている時代だ。「お金」本意から「心」本意への価値観、人生への視点の回帰。農村らしさ、何ちらしさ。それを強要するのではなく、一人ひとりが輝くために、「らしさ」を育んでいくこと。

前向きのところだから。もっと、自分の生き方に自信を持つのではなくか。「らしさ」を見つめないと、は、自立への一步だ。

土にまみれて働く。土と対話し、ながら暮らす。農業を継ぐ者は、年々減り続けいまや、単年度における全国農業就業者数は、一大企業の就職者より少なくなっている。

私は、「農」の持つ素晴らしさを感じることができない……「農」の暮らし、文化をしっかりと発信して安心の老後を支える「農の経済」をしっかりと作る」といた。

就農のことがよく語られるが、まずは考えなければならないことは修農のことだ。「農」を支えることは、地域を支えることだ。どのように「農の心」を伝えていくか、安心の老後を支える「農の経済」をしっかりと作る」といた。

修農者が「農のこころ」を伝え、農村文化を伝える「農の人」として地域に輝く、生涯現役の「農の場づくり」を確立していくなければならない。

また、就農についていえば、土地の私有制がやはり問題だ。現行制度の中で、土地を共有あるいは

実を直視し、農業就業者の問題について考えなくてはいけない。

集約管理していく。豊かな人生の基礎づくりとなる「農の経済」を支えるシステムが必要だ。長男だから嫌々農業を継ぐ必要はない。土地にしばられているからだ。土地の有効活用、卒農後を支える借り農のシステムも含め、「農」の精神を育む土地 자체が抱える問題に大胆に目を向けてみる必要がある。

これからの農業は、農業にしつかり向き合って人生を営む人が農業を営んでいくスタイルになるだろう。都会の人を受け入れるにしても、地域環境も含め、少し長い期間で人を育むシステムづくりが官民、地域一体の中で構築される必要がある。まだ、ただ単に後継者がほしいから、困っているから受け入れるではなく、ピザを発給する、人を地域が選ぶくらいの毅然としたスタンスが必要だ。

地域として應分の責任をもつといふことだ。

就農と修農、このシステムを一体のものとしてどうえ、生き甲斐を、誇りを持ち、安心して農業と

向まくの環境づくり、「農の経済」の確立が心の豊かな農村を作つていく大きな要因になると考へている。

* 農を拓く、地域農業

研究所のあり方*

農村という考え方、意識の設定を見つめなおしてはいかがかと思う。北海道にあつても農村は、関わりとしては意外に閉じているのではないか。いわゆる村社会を構築している。農村は、地域の中にあって、農村を地域の持つ個性として捉えてみる必要があるのでないかと思う。今後の農業を見つめる上でも、もう少し広い面の中で農村を考えたい。農業、農村を地域にかえそうと思う。

農村と地域が良きパートナーシップを築いていく上で、地域農業研究所のあり様が大きな課題になる。私は、「農」を拓く「核」となる地域農業研究所には、三つの特性を持たせたいと考えている。
①としては、「農」にまつわる懸



▲第2回常呂町生涯学習セミナー(平成6年10月6日)「第8講・福山料理実習」
(前列の一番右が筆者)

話会、サロノの性格。農業に関わる人、関心のある人の多いが自由に意見交換できる場です。

農業者、農業機関関係者はかりでないいろいろな人たちが参画できる場を持つ。「農」に対して心を寄せてもらう。「農」を育む応援団として心を開く場だ。「農」は地域の中に活動していくのだから。

◎としては、①ガ鳥の田線だとしたい。これは、虫の田線だ。一人ひとりの農の現場をきめ細やかに、耳を傾ける。土は、健康な、経営は、暮らしさ。心と心を結ぶサポート・ワークを徹底するシステムづくりが必要だ。特に、農業に関する「一タルなマネージメント・システム」を構築していかなければならぬと思う。

また、「農」を支える、築く、パートナーとしての女性の経営への参画、暮らしへ寄せる女性たちの田線をしっかりと受け止めることの大切だ。女性せいの間に一番近いといふことにいるのだから。

◎としては、②農の田線だとしたい。これは、心の田線だ。一人ひとりの農の現象をきめ細やかに、耳を傾ける。土は、健康な、経営は、暮らしさ。心と心を結ぶサポート・ワークを徹底するシステムのつくりが必要だ。特に、農業に関する「一タルなマネージメント・システム」を構築していかなければならぬと思う。

◎としては、③農の田線だとしたい。これは、心の田線だ。一人ひとりの農の現象をきめ細やかに、耳を傾ける。土は、健康な、経営は、暮らしさ。心と心を結ぶサポート・ワークを徹底するシステムのつくりが必要だ。特に、農業に関する「一タルなマネージメント・システム」を構築していかなければならぬと思う。

* 一握の土塊(つちくれ)に夢を託して*

まだ、方向として考えていたことは、「水」「川」「森」を組み、「地域」自給自足へ、更には、「田」全体が自給自足の宣言をしていくといった、豊かな広がりを期待したい。

このことは、「水」「川」「森」を始め、「のち」を育む生態系の確立のために、ひとつ生命体としての私たちの人生。ひとつ生命体である私たちが、自然の生態系のズームの中で、生きさせていく。地域に生きる、無数のいのちとのやつらの中。共に生きる生命体として、この自然と関わっていかなくてはならないのか。「共生」が私たちを育むとしたが、暮らしのあり様を見つめなおすことにつながる。「共生への共感」から生まれる「暮らしの実践」は、きっと、地域、暮らしの見え方が、心の向き方が、変わってくるに違いない。そこには、いのちを育む豊かな「自然」との、新たな創造的なパートナーシップを地域に生み出していくことだろう。

一つめとしては、「農」が育まれてきた、地域の歴史、風土に謙虚に学ぶことだ。自分たちのまゝ、

これからを見据える上で、しつかりとした地域観、歴史観を持つことが必要だと感じている。自分たちが暮らすこの大地にござまれた汗や、涙や、喜びを、時空を超えていま分かち合おうではないか。一つひとつの物語を、次の世代に誇りを持って、伝えようではないか。

過去と対話することは、心を、精神を育んでいく。未来は、過去の先に見えるものではなく、過去の下に見えてくるものなのだ。

地域が持つ豊かな風土に育まれ、やがて「土」に帰っていく私たちの暮らし。より豊かにたくましく支えていく、新しい文化・風土を産み出すいきいきとした創造力と、多くの困難を乗り越え、生きる力が湧きてる「農の心」をこの大地に灯そとはないか。そのためにには「夢」を持とう。時代へ繋ぐ夢でもいい。私、家族、地域、一人ひとりが、夢を持とう、語ろうではないか。そしてその夢を、実現しようではないか。一「農」にはそれが出来るのだ。可能性に満ち溢れているのです。

第2回常呂町生涯学習セミナー
第10講・農業実習「コボウ掘り」

平成6年10月7日



いま、求められているのは、大きな勇気ではない。踏み出す一歩のためのちいさな勇気だ。そして開かれだ心。「農」に耳を傾けよ

う、心を寄せ合おう、だれもが初々しく「農」と出会った心に、いま一度立ち返ってみようではないか。

に生かされている、私たちの責務

の土塊から育まれる、「農」文化の大河づくりを、この台地に立ち、この大地に感謝し、この豊かな大地から発信していくこと、このことがない。このことが、「農」

子供と花に囲まれて「農」に生き甲斐を求めてつづけたい

知内町 重内 大嶋 真砂子

(一)

私が、この知内町に嫁いでから、早くも一年の日が流れ去るうとします。最近ようやく町の地理がわからはじめ、この町に親しみを感じています。

私と旦那とは、結婚する年ほど前に友人の紹介で知り合いました。知り合った当時、旦那は大学生だと聞かされました。しかし、つきあっていくうちに旦那の職業が農業と知り、しまつたといふ気がしました。でも長いつきあいの中で旦那の農業に対する考え方、職業意識、夢などを聞かせら

れ、それに向かって突進する姿に魅せられたのを覚えています。

私が最終的にこの人に決めた理由は、何といっても旦那の人柄です。私の旦那は負けず嫌いな性格で、少々怒りやすいところもありますが、こうと決めたら必ずやり遂げる頼りになる人です。また、その反面意外なほど独創的で自由な発想の持ち主です。これは「農業だから」「サラリーマンだから」といつたことは関係なく、その人自身の魅力のような気がします。

ではあります。この今の旦那に嫁いだのです。私との気持ちが合つた人それが今の旦那であり、その人がたまたま農家であつたに過ぎないと思っています。ですから、農家に永久就職を決めたことに後悔はありません。

結婚して農業を身近に感じ、自分もその一員として取り組んでいるわけですが、最初は土地の広さや機械の多さ、そして、施設の広さにとても驚きました。今まで一度も農業を経験したことのない私にとって、これだけの土地を維持し、機械や施設を巧く使い分け

ている農家の方々には感心させられます。しかし、その分だけ農業の経験がない私には些細なことも難しく、いまだに戸惑うこともあります。くさんあります。

この二年間、ひと通り農業に慣れました。旦那や家族の助けを支えに、今はゆっくりと勉強していくつもりでいます。

(二)

ところで、我が家は経営は水稻（一四㌶）を中心に、畑作（四・五㌶）施設園芸野菜（一、八〇〇坪）



大嶋 真砂子(おおしま まさこ)さん
(お住まい: 上磯郡知内町字重内65)
写真は、平成7年2月25日・お嬢さん
と一緒に。

を切り回しています。中でも施設園芸野菜は、知内町特有の夏冷涼、冬温暖の気候を生かし、二三とホウレンソウを中心に栽培しています。

二三は、四月の播種から始まり七月に定植します。一度定植した苗は二年間収穫できます。七月から十一月までは成長期間でハウスの二三は外していますが、十二月になると二三がけをします。二三は二重構造にして、無加温で真冬でも一定の温度を保ります。収穫は一月末から五月まで行いますが、刈り取つたあとで調整に意外と手が掛かります。



▲最愛の「旦那様」とめでたく結ばれる

私も勿論手伝うわけですが、素

早く一定の量を上手に束ねられるようになるまで苦労しました。

ホウレンソウは、約二十五日、三十日サイクルで、播種から収穫まで行います。真夏の高温時期の栽培は、品質低下防止用の遮光ネットを張つたり、水分管理にて

も気を遣います。ホウレンソウは播種から収穫までの期間が短い上に、時期をむらして植えるので、夏場の最盛期には毎日ハウスの中で作業することになります。それでも、作業が負けてしまうのではないかというほど忙しい毎日を送ります。

そんな知内の二三とホウレンソウは、身厚で柔らかく、健康食品として市場で高い評価される」とは、私にとってもとても嬉しいことです。

一方、水稻の作付は、「ほのか224」・「ゆさひかり」・「あめり397」の三品種を行っています。水稻は野菜と違い、約一年間の長い月日をかけて収穫するわけです。

水稻は野菜と違い、約一年間の長い月日をかけて収穫するわけです。

一方、平成五年は極端な冷夏にみまわれ、本当に大変な年でした。戦後最大の大凶作とまでいわれ、町内でも米を求める人が長

列が出来、平成の米騒動とまでいわれました。我が家も例に漏れることなく大きな打撃を受け、米の収穫については殆ど皆無に等しかったのを覚えてます。

そんな中、政府は緊急に米の一部市場開放の措置をとり、農家にとっては不安の種の尽きない情勢です。このように、私が嫁いでからの一年間は農家にとつても消費者にとつても忘れることのできない期間でした。

(III)

さて、田舎ののような難しい問題を抱え、忙しい日々を送っている私たちからストレスもたまっています。そのストレス解消と勉強を兼ねた交流の場として、私達夫婦が活動しているサークル「夢つづり」について紹介します。

「夢つづり」とは、平成五年に結成した農家の新婚さんを対象としたサークルです。主に農村のありかたの勉強会や様々な交流会を通して、作業の喜びも一入です。夢つづりについても紹介します。

農業改良普及センターや、町、農協といった関係機関の助言をもとに、「明日の明るい農村づくり」を目指し、作物の現地研修や道南農試への視察を行つてきました。また、口頭抱えていた問題の改善策やいろいろな意見交換なども行つています。

視察は、自分たちも手掛けている水稻とハウスを中心にして、町内における先輩農家を回りました。具体的な肥料の量や使い方、作付方法など私たちが普段やってみてわ

ならないことが多いので、とても良い経験になりました。私自身、わからぬことだらけなので、毎回必ず一つくらいは何かを吸収出来るように心掛けて楽しく参加しています。

過去何年かは、不作が続き農家にはダメージの大きかつた年もありましたが、天候に左右されやすい職業なだけに天気が気になるようになりました。この「夢のラブ」の交流会や勉強会が何カの形で農家のプラスになればと期待しています。

現在ラブ員は六ヵップルですが、これから結婚する方々に活動内容やラブの良さをもつと理解してもらい、どんどん輪を広げていければと思っています。



◀ 目に入れても痛くないほど
可愛いお子さんの誕生



◀ 「夫婦でくつろぎのひととき

上で買つてもらいたいと思います。また生産者も、消費者一 eins を再確認してこれからの経営に生かせる形での交流会を行えれば、旦那と話しています。

実は、昨年十一月に我が家にも初めての子供が生まれ、ただいま子育てに奮闘中の毎日を送っています。一日一日大きくなつていて我が子の成長をみて、自分の幼い頃を思い出したりしています。そして今、自分が田親の立場になつて子育てを経験してみると、子育ての忙しさや難しさが身に沁みます。ですから、私をここまで育ててくれた両親に対し今まで以上に感謝の気持ちが高まっています。

そして、一人の子供を育てていく責任の重さや充実感をずつと感じ、改めてこの子の為にも頑張つて行かねばならないという気持ち一杯です。

昔と違つて最近は出生率がとても低くなつてきています。これから先、子供については同年代の遊び相手が減つていき、子供が安心して伸び伸び遊べる遊戯場も減つてゐるのではないかという心配もあります。

(四)

これまで農家と子育てを両立させて生活していくことになりますが、両方とも旦那と協力し合い、旦那の両親に助けてもらひながら頑張つていただきたいと思います。

先日、何気なく見たテレビで、「過疎を楽しむ」という題の番組がありました。内容は、都会の子供たちが小さな村で自給自足の生活を一週間体験するというものでした。都会で塾通いの子供たちが農村での生活を楽しみ、いろいろな知識を得ていました。その子供たちの表情はどれも実際に生き生きし

北海道の自然もどんどん都市化が進んで変わつてきています。幸い内町は安心して遊べる場所がまだ残つていますが、自然とのふれあいを大切にしながら子育てをしていきたいと思っています。その、ふれあいの中で子供たちがいろいろなことを学び、知識や経験を得てほしいと思っています。その為にも、農業をもつと楽しめる環境と、気持ちの余裕が欲しいと思っています。



▲『夢クラブ』ヤングミセス現地研修



▲『夢クラブ』勉強会

たものでした。これを見て農村も悪くはない、私もここでいろいろなことを学びつつ子育てをしていく、という勇気と意欲が湧きました。

番組の最後に地元住民のインタビューで、「昔はよかったです、今の農業は利益追求の手段だけだ、なぜ変わってしまったのか…」と、嘆いていました。これには私も心が痛みます。確かに生活が掛かっているので、一定以上の収入が必要ではあります。ですが、それのみの追求というのも寂しいものを感じます。
3Dと言われながらも農業を続けていく以上、そういう『マイナス』イメージの強調ではなく、むしろ農業だからこそその楽しみや豊かさを求めていきたいと思っています。その点で、今の農業は金銭の富を得ていますが、心の富は失つてしまっているような気がします。

私は、せっかく農家に嫁いだのだから自給自足でも、子供と花に囲まれ、生き甲斐を持った人生を歩みたいと思っています。それが本来の心豊かな農業の姿ではないのかと私は感じています。



▲『夢クラブ』・町長と語る夕べ

ハーブを導入して心豊かな

農家生活を持続する

東川町 西七号 中田 正俊

北海道の中央に位置する上川盆地で、旭川市から東へ約一四kmの東川町で農業を営んでいる私は、開拓のワーカーを入れた祖父そして父が引き継ぎ、その農地を三代目の私が引き継いで三十余年になります。旭川農高を卒業して父や祖父の農業を手伝っていました頃は、特別な希望も意欲もありませんでした。農村に生まれ育つた五人兄弟の長男だったということで、青年団に4-Hクラブに地域のサークルあるいは小グループに参加して、活動は進んで楽しく、農業はイヤイヤという具合で数年ガラッという間に過ぎてしましました。

その間には、農村の近代化、機

械化、大型化等と一〇年ばかりが五年一昔で進んできたような気がします。そのような時代に農業にたずさわっていたので、辛くて厭がるという農業ではなかつたと思います。それよりも、私もうであつたが自動車とカリヤカーの時代からバイク、乗用車、トラックなどどんどん入り、農村家庭の電化やガス化が急速に進み、視察研修旅行は汽車からバス、自家用車、道外へは飛行機で行くなど、私の農業青年時代はとても華やかで楽しい時期であつたと思います。

そんなこんだで、昭和五十年代から経営を受け継ぎ、妻と一緒に自分なりの農業を営むことになりましたが、その頃から農業情勢が変わつて、米余りによる減反とか、農産物の一部自由化、価格の下落など、周りが慌ただしくなつて、私もその頃より、転作・減反政策に同調すべく水稻以外の他品

で優良米産地とリンクづけされ

中田 正俊（なかた まさとし）さん

経営概要：面積10.1ha（水田8.68ha）転作畑1.42ha
ハウス100坪×5棟、育苗ハウス50坪×5棟）

水稻のうち6.6haは特別栽培米きらら397。ハウス栽培品目はメロン、ホウレンソウ、モロヘイヤ、フレッシュハーブ etc。露地栽培は、スイカ、南瓜、スイートコーン、ハーブ各種 etc。生産額概算：1億6000万円。

ご家族：奥様（秀子さん）とご両親
お住まい：上川郡東川町西7号北45番地。

写真は奥様のアイデアから生まれたメッセージ▶
入りのスイカを抱いた筆者。



目を取り入れて農業経営をする」とになりました。

一般的には転作田に麦、ピーマン、豆類など政府が奨励する品目を作付してみましたが、「一番困った」とは限られた転作田にこれらの畑作物を植え続けると連作障害が起きることでした。作付品目を毎年変えると農機具が間に合わないとかの問題が出来、これも悩みの種です。畑作道具が一切無いに等しい状態でしたので、四五%も休耕した時は農協の機械銀行からの支援で切り抜けましたが、これが結構馬鹿にならない経費でして所得率がかなり落ちます。

その頃は、色々な品目に手を出して作付しました。豆類のときは小豆ではなく白小豆を導入し、交



▲ドライフラワーをつくる奥様の秀子さん

付金大豆ではなく黒大豆をマルチ栽培したり、野菜もハウス物とトネル露地物を年中通して、スイカ、メロン、南瓜などをやってみました。この他、葉菜類も取り組んでとにかく連作障害を避けるため、色々な品目を転作田に植えました。ですが、これを毎年つけると労力、資材、管理機具が伴わない状態になり「タマヨロスが多くて、苦勞のわりに所得に結びつかない日々が数十年経ち、今日に至つてあります。

これは私だけ「んやない」農家の皆さん同じだと思います。

そんな中、私は昭和五六年頃より、当時話題になりはじめたハーブを少々つまみながらやり始めていたのです。今振り返るに行

政指導機関は、やはり必要かつ頗もしいものだと思います。当時の役場農林課のM係長が、「新規特定品目の奨励」等といつて「転作田に作付しましょう」とハーブの苗を数種類取り寄せて、私共有苗を数種類取り寄せました。



▶ハーブ見本園にて中田さんご夫婦

主体である米も、特別栽培米制度ができた時に農協の営農課長であるM氏に、「これからは化学肥料だけで多収をねらうのではなく土に優しく、消費者に安心して喜んで食べてもらえる「有機減農薬栽培米(特栽培米)」を作つてみたら」と言われ、手掛けはじめて七年目になり、今では当面でいち早く取り入れたヘリコブター防除を行わず、除草剤一回のみという栽培方法による特別栽培米を消費者に直接届け喜んでいただいてあります。

それから特栽培米、有機野菜とハーブの関わりですが、ハーブの中には病害虫忌避の働きをするものがあることを知り、その中でウコン、カメ虫などに対し忌避作用をするハーブ(カモミール、チャイノードなど)もあり、それらを水田の畦に植えることにより害虫が寄りつきずらい効果を利用したり、雑草が繁った畦でなくハーブの花が咲く畦道ということで訪ねてこられる皆さんに喜ばれています。

農業に携わって現在までの二〇

年を大まかに記述しましたが、私が言えることは、年に一回しか獲れない農業、自然相手の農業、農業者を取り巻く情勢(農政、行政:諸団体、商社・業者など)を無視せず、さからわず、自分のベースでそれらを合わせ、栽培作物と一緒にすむことにより、一年が苦でなく楽しく終われる農業をやつづけることだと思います。



▶作況調査をする中田さん

だが、私は時の流れに逆らつて何か行動を起こすと、身体がつらいし夜も寝ないで頑張らなくちゃいけない結果になりがちだと思います。無理な計画を立てず自分のペースに合った計画だと、そんな心配はない。しかし、先を読み取る行動は必要かと思います。一日先、一週間いや一年先、十年先はどうなるかなと思う心は絶対必要だと私は思い、やつてきました。例えば、妻と父母の四人で、五のものが七から一〇まで拡大できても後継者がない私共には、一〇年後、二〇年後には縮小もしくは維持するための設備が必要となります。現状のままでは体力が続かなくなることから、老後に備えた環境、貯えも必要でしょう。サラリーマンに定年があるように、私達夫婦にも農業の定年がやってきます。その時に、六〇kgの米袋を扱うのはとても辛い。一〇ha耕すのも辛い。ハウス管理も大変です。いまから自然管理システムを少しづつ取り入れるとか、乾燥調整作業も機械や道具を上手に取り入れて使う方法を、無理せず少しづつ先を

読んで取り入れていいくことは必要で、それらを自分の経営に合つた中で、ある時は先行投資の部分もあるうかと思うが、それによつて一人で将来に向かつて楽しみながら農業をつづけられることが一番です。

害虫忌避のためには植えられ
ハーブ

農業を楽しむ中田さんの農業経営

J A ひがしかわ営農課長 村瀬慎治

「心豊かな農家生活の持続的な展開」を目指す東川農業の中には、中田さんの農業は正に心豊かな農家生活を地でいっていると言える。特に、昭和56年にハーブを導入してからは楽しめる農家生活を意識した取り組みがなされているようだ。

樹齢約90年の赤松をシンボルツリーとした宅地周りの田園風景は美しく、町道から住宅までの20m程の木戸道の両側には、ハーブ（チャイブ）が植えられ、目を見張る紫の花が迎えてくれる。

住宅の横には、東川町の文化財にも指定されている漆喰の倉が昔の農家屋敷を連想させてくれる。住宅周辺にはゴミひとつない。庭の片隅には手作りの数個の灰皿が据えられ、常にきれいにしている心がけを知ることができる。

農舎や車庫の天井や壁にはドライハーブが沢山下げられている。自家菜園畠の一角には30坪程のハーブ見本園があり、数十種のハーブが植えられている。私達が中田さん宅を訪れるとき、奥さんの秀子さんが自家製のハーブティーを煎れててくれる。

ハーブの栽培や花を楽しみ、ドライフラワーやリース作りを楽しみ、お茶やお風呂にして楽しみ、苗やフレッシュハーブとして販売をして利益をあげる。さらには水田畔に植栽し害虫の忌避と景観作りに役立てている。平成元年からは有機減農薬栽培の特別栽培米づくりを始め消費者との交流をつづけている。多くの消費者が中田さん宅を訪れて、中田さんの農家生活や考え方方に接し、多くの消費者が感動し、農家や農村、農業や食料についての認識を高めていると共によき理解者、支援者となってくれている。

中田さん自身も、消費者との交流の中でさらに農家生活の価値観を知り、それを高めていく。そのことにより農業に自信と誇りを感じ、楽しく農業を実践している。

中田さんの口からは「農業は厳しい、大変だ」などの、悲観的な言葉を聞いたことがない。常に新しい発想と行動のなかで農業を実践している。秀子さんのアイデアで、スイカにメッセージを彫り込み宅配（ギフトなど）してみたり、フレッシュハーブとしてチャイブやバースレ、ビルなどを東京に出荷したり（現在は4人の仲間と協力して実践している）。新しい品目も積極的に導入している（ズッキーニ、トレビス、チマサンチ etc）。春、秋の2回開催している「くらし楽しくフェスティバル」では、毎回訪れる2万人以上の人達に対しハーブの苗やドライの販売をしながら農村文化を提供し、好評を博している。

少しの暇をつくりだし、道内、国内、外国を見聞して歩き、新しい発想やアイデアを作り出す情報源としているようだ。常に前を向いた行動力と決断の速さには敬服する。

中田さんは「経済活動をしていく場合は、どの業種も常に努力していくことが必要であり、その部分では農業も同じだ。しかし、それだけでは農業を行う価値は無く、農業だから、農村だから出来るものをやっていかなければ…。せっかく農業をやり、農村に住んでいるのだから…」と、庭に置いたテーブルに座り、ハーブティーを楽しみながら話してくれた。こんな生活は、都会の金持にも出来ないものであり、ここに価値観を見つけて農業振興していくことが大切なんだということをしみじみ感じた。

方法、移動中のスタイルなども興味を持つて見ていている。これらはとても楽しいことである。こんな具合で、何でも全て自分に結びつけ置き換えてみると旅行に行つても、視察に行つても非常に楽しいものです。話は戻りますが、米作一本の私が、転作が始まってから色々な物

を栽培してきましたが、失敗したもの、成功したもの全てが勉強になり肥となって、今、現在やつていくことが出来ると思い、お天道様に逆らわず自然と一緒につなげて、世の中の状態を見極めながら無理なく楽しく農業を続けたいと今のこの時も思い、考えています。



▲特別栽培米の圃場にて

上村 美智子（うえむら みちこ）さん

1943年静岡県に生まれる。1965年渡道、結婚（夫・旭川市役所勤務）。1971年秋、現在地に新規就農、メロン栽培。1978年全国の農村女性ネットワークを発足。1981年「毎日農業記録賞」受賞。1984年自分史「花びらのつづく道」自費出版。1986年農村女性文集「あぜ道」編集発行。1989年農村女性文集「ともしひ」編集発行。1994年「ま・な・び・す・と大賞」を受賞。現在、メロン20アール、サヤインゲン5アール、燕麦（綠肥すき込み）2ヘクタールを経営。家族は、夫と長男（19歳）およびファームスティの小学生2人。お住まい：旭川市西神楽16号 3-102 TEL：0166-75-3505



新規就農二十四年目

「花のある暮らし」を夢みて

旭川市 西神楽 上村 美智子

裸一貫・脱サラ新規就農

新規就農を志して旭川近郊に農地を取得し、親娘三人で移り住んでもう二十四年目を迎える。結婚して六カ年のサラリーマン生活から農業人生に転じたが、夫の描く青写真、生涯設計に近づくのはいつだろ？と私は一心農作業に励んだ。

けたことがない私が、通年雇用の皆と畑に出て最初に教わったのは作業「手袋のはめ方」だった。出面さんに肥料袋の扱いや開け方など教わり、しつかり昼寝をする必要性も教わった。だが実際には一緒に横になっても眠れず、二人三人と自覚めるのを待つて起きる気の休まらない休息だった。

本州から嫁いで、雪国の気候風土にもまだ順応できない私が、給料取りの妻から一転して農婦になつて、気はあるのだが体がついて来なくて気管支炎やギックリ腰を度々起こした。

充分な作業姿勢ができない私を見て「そんな」としていたらいつも体を壊す…私達がするからあつて脱力、「ハツ」と氣づくと夫と皆が帰ってきた。ほんの一瞬

公務員住宅に住んで菜園も手がけ前しか考へる余裕がないほど没頭した。でも、親の職業選択のために子供を犠牲にしたくないと田として私は念じた。

三分と目を閉じた私は、地下タビも脱げず上りかまちに身を投げ空白の中に入った。

収穫期は夕食にはぐれるほど忙で、市場に向かつて百歩も走るともう助手席で眠りこける有り様で、慣れない北海道農業に私は疲労困憊の連曰だった。

充分な作業姿勢ができない私を見て「そんな」としていたらいつも体を壊す…私達がするからあつて脱力、「ハツ」と氣づくと夫と皆が帰ってきた。ほんの一瞬

腰を休めない。私は、夫の一言を待つた。

とにかく過酷な毎日だった。覚悟はしていただけど新規就農の実態を知らない者の覚悟は夢いもの、私は案の定、体を壊して入院をくり返し、仕事に就けない身となり人間には限度があると病床で反省をしほ復を待つた。

農業に夢をかけた夫は私より先に起き仕事一途、そしていつも、相棒仕事で私を必要とするのだった。農業面の困難はともあれ、子



▲「花のある暮らし」を夢みて…
メロンファーム・うえむら

脱サラ農業を始めた昭和四十年代は農業が衰退し、新規就農は時代逆行した生き方だったと思う。その選択には自己資金がない身での起農（新たに農業を始める）は無茶、とうてい賛成できる転職ではなかつた。でも私は物申す勇気もなく黙つて従つた。

親から受け継ぐものが新しい新規参入農家は一年一年が厳しい闘門で並ぶ道のりではない。旭川の隣町「JAたかす」は数年前から新

供の教育と共に意識が得られない方たりした時、私は就農そのものに怨みさえ覚え農業生活に絶望した。そんな時に毎日通ってくれる出面さんが「この土が、いつかきっと上村さんをラフにしてくれるわ…」と言つた。土が幸せにしてくれるというMさんの言葉は新米受けた。重みのある先輩農婦の諭しがそれから私の日々に励ましどなつてついて來た。

農婦に意味を深めて伝わり新鮮に受けた。重みのある先輩農婦の諭しがそれから私の日々に励ましどなつてついて來た。

阪神大震災で被災の

小学6年生一人を預かる

夫は農家の二男だった。だが公務員を自主退職しての就農で新規参入農業に転身するにあたり要である経済基盤がなかつた。初年度の多額な投資、資金借入返済のためにも収入を伸ばさねばならず、仕事のサイクルは猛烈で止まる」とを忘れた籠のコマネズミのように働いた。冬の日も連日軟白川リバの生産出荷、床に就くのは零時すぎが常だった。

脱サラ農業を始めた昭和四十年代は農業が衰退し、新規就農は時代逆行した生き方だったと思う。その選択には自己資金がない身での起農（新たに農業を始める）は無茶、とうてい賛成できる転職ではなかつた。でも私は物申す勇気もなく黙つて従つた。

親から受け継ぐものが新しい新規参入農家は一年一年が厳しい闘門で並ぶ道のりではない。旭川の隣町「JAたかす」は数年前から新

規就農後三年間で一千万円を据え置き二年・償還十三年で貸し出すという。帯広でも若い手育成を目的に都会に住む新規就農希望者に通信教育を施し、就農時は市が農地斡旋などして援助するという。新卒者やリターンも減少、ますます農業従事者は高齢となり離農も進む時、意欲をもつて外から来る者に手段を与え導く対応が求められていると思う。

何の後ろ盾もなく私達夫婦は自分の足で農地を探し歩き、営農準備金もないまま農家の一代目となつて、知り合いや保証人もなく村に入り何をするにも当然ながら壁ばかりだつた。耕地、家屋、農具に施設と一切を背にスタートしたので豊かさとは中々縁がなかつた。反面、無一物で就農したからこそ会得したことも多く、ゆえに今の日々があると自負もある。

振り返れば「農業をやりたい」

の一念で突き進んだ夫は本望であろう。零細な農家だけど売るため

に育てたバンジーを施設に寄付、匿名で申し出たのに「農家ならぎ



▲東京での授賞式に全国（北海道～九州）から集まった仲間たち。
(中央は選考委員のひとり、見城美枝子氏。筆者は右から4人目)。

つと車に名前があるヨ」と知的障害を持つ皆さんが拍手で迎えてくれたつけ。メロンの規格外品がドツサリ出て泣きたい時に、夫が家庭に恵まれない子らを思い出してプレゼントした。長年、学校花壇の草花を栽培したが、何より思ひ出すのは新規就農の初年度に実生したレンゲツツジが成育して花付け始め、小学校や中学校、保育園などに百本ずつ寄贈できただけである。二十三年経った今それぞれ公共施設で円滑され、私達夫婦の初志と夢を咲かせている。

精いっぱいの農業人生でも自分の生産活動を通じ社会に関わる気持ちが生まれ、有形無形の行為や生き方が現せることは我ら夫婦の歴史の一部でもある。今はあの阪神大震災で被害を受けた神戸の子供一人を受け入れて束の間の親代わりをしている。小学六年生の二人の女の子はホームシックもなく元気に北国の暮らしを楽しんでいる。

「義務教育の一貫として、どの子も一度は、農山村留学をさせたい」と、以前から私は唱えていた。

つと車に名前があるヨ」と知的障害を持つ皆さんが拍手で迎えてくれたつけ。メロンの規格外品がドツサリ出て泣きたい時に、夫が家庭に恵まれない子らを思い出してプレゼントした。長年、学校花壇の草花を栽培したが、何より思ひ出すのは新規就農の初年度に実生したレンゲツツジが成育して花付け始め、小学校や中学校、保育園などに百本ずつ寄贈できただけである。二十三年経った今それぞれ公共施設で円滑され、私達夫婦の初志と夢を咲かせている。

精いっぱいの農業人生でも自分の生産活動を通じ社会に関わる気持ちが生まれ、有形無形の行為や生き方が現せることは我ら夫婦の歴史の一部でもある。今はあの阪神大震災で被害を受けた神戸の子供一人を受け入れて束の間の親代わりをしている。小学六年生の二人の女の子はホームシックもなく元気に北国の暮らしを楽しんでいる。

つと車に名前があるヨ」と知的障害を持つ皆さんが拍手で迎えてくれたつけ。メロンの規格外品がドツサリ出て泣きたい時に、夫が家庭に恵まれない子らを思い出してプレゼントした。長年、学校花壇の草花を栽培したが、何より思ひ出すのは新規就農の初年度に実生したレンゲツツジが成育して花付け始め、小学校や中学校、保育園などに百本ずつ寄贈できただけである。二十三年経った今それぞれ公共施設で円滑され、私達夫婦の初志と夢を咲かせている。

精いっぱいの農業人生でも自分の生産活動を通じ社会に関わる気持ちが生まれ、有形無形の行為や生き方が現せることは我ら夫婦の歴史の一部でもある。今はあの阪神大震災で被害を受けた神戸の子供一人を受け入れて束の間の親代わりをしている。小学六年生の二人の女の子はホームシックもなく元気に北国の暮らしを楽しんでいる。

つと車に名前があるヨ」と知的障害を持つ皆さんが拍手で迎えてくれたつけ。メロンの規格外品がドツサリ出て泣きたい時に、夫が家庭に恵まれない子らを思い出してプレゼントした。長年、学校花壇の草花を栽培したが、何より思ひ出すのは新規就農の初年度に実生したレンゲツツジが成育して花付け始め、小学校や中学校、保育園などに百本ずつ寄贈できただけである。二十三年経った今それぞれ公共施設で円滑され、私達夫婦の初志と夢を咲かせている。

精いっぱいの農業人生でも自分の生産活動を通じ社会に関わる気持ちが生まれ、有形無形の行為や生き方が現せることは我ら夫婦の歴史の一部でもある。今はあの阪神大震災で被害を受けた神戸の子供一人を受け入れて束の間の親代わりをしている。小学六年生の二人の女の子はホームシックもなく元気に北国の暮らしを楽しんでいる。

農家の子も家の仕事に関心を示さない現代だけど、都会の子にも体験の中から農業は大切なものの、農業は食べ物を作ることを超えて風土を守るという価値があることを身近などうから伝えたいと思つて

いる。

縁あつて家族になつた二人の女子に私は早速青菜の種を渡して一緒に育てた。最初三三三を見て気持ち悪がつていた子も生物の役割を話すと愛しそうに土にもどしていった。恐怖の地震ゆえだけど、この子たちの未来に北海道で「ファームステイしたことがきっと彩色されると思う。

春だっさりや

上村美智子

姉ちよ
川原の土手さバッケおがくらよ
土のかよりっこするよ

姉ちよ
柳のボンボコふぐらんできにと
せきの音こ聞こえるときや
なしてこつたらにおもしれんだべな
春だっさりや
春が来てらんばっさりや

裸一貫の就農で人知れぬ不安を抱く連夜だつたけど、そうした心のあき所として私はいつも活字を求める手帳を持っていた。ひそやかな楽しみは新聞に投稿して図書券などをもらうこと、理不尽ばかりの現実を振り払い小さな幸せを見出していた。そして活字になると読者から感想や文通申込みが舞い込み友達が次々

と増えていった。

農村生活に入り一番空虚に思うことは話し合う人が少ない事で、同一価値観で共鳴し合つたり意見交換する仲間がない事だった。家業に縛られ思うように外出できないという現実も加担していくが、私は友達に飢えていた。様々

私は全国に散在している農村の仲間に呼びかけ、「ともしひワーキング」を発足した。二年後、緑黄色野菜「バ

三年二月、昭和五十一年の「道」と題する文集を編集して

全国の農婦と「こころの回覧 ノート」が十八年目



▲体験文が「ま・な・び・す・と大賞」を受け、受賞者を代表して挨拶する筆者。

歳をとるの
はいやだ、
もつと自分
といふもの
が欲しいと
痛切に思う
ようになつ
た。そして
暗中手さぐ
り、行き着
いたのが各
地の農婦を
輪にしたネ
ットワーク
を作ること
だつた。

自分史『花ひらのつづく道』と、これまでに編集されてきた農村女性文集の数々。





▶メロンの選果作業・出荷準備に余念がない筆者

媒体としたグループも生まれ、皆でベンを持ち合い回転ノートの交流を転々として親睦を図つた。曰頃実践していることや考え方、提言、一冊のノートはよろず相談も乗せて東西南北リレーされた。友を求めているのは私だけではなかつた。

回転ノートの会員は四十二名、

當農形態は專業・兼業・パートと

それぞれ異なるが、よりよい農村生活を望み、自分を一步でも向上させ生き生き暮らしたいと願っている。

人は信念と共通意識の中での切磋琢磨で成長するのではないだろうか。出来なかつた…のではなくやうなかつた…とに気づき、不満を排除し、「誰もが太陽であります

る(島崎藤村)」こと山田覚め、人間は拳を握つたまま笑えないから忘れる努力も必要と…そして心がスッキリすると次は何かと色々な事が浮かんで来よう。

農村に限らず人間の喜び悲しみ、怒りなどの感情はすべて周囲の人との関わりの中から生ずるようと思う。つい幸福も不幸も自分の描いたように言つてしまいがちだが、仲間とのつながりの中で悦びや悩みを共有し合うことによって「ミコニケーション」が生まれ、悲しさ悔しさの涙より人のために流れる涙が眞実と気づいていく。身内や近隣には話せない事柄も、一本のベンで培つた友情が心情を吐かせ、ノートが一巡する頃は、不足は不足を呼んで、悦びは悦びを運ぶ原理を悟る境地となっていくのだった。

農家のお田さん達と心の向くままベンをとり、文集を作つたり自ら研修の集いをしたり、農業に励んでいる仲間たちの活動も十八年目を迎えた。農婦が物を書き合つて、とかくクチや悩みの羅列と思われもするが、世話を人の私の生活信条が波及して仲間たちは前向きにベンを運んでいる。知識を分け合い智慧を伝え合い、皆で書き続けた証のノートも百数十冊を数えた。これからも仲間たちとしつかりした農業哲学を持つて心を結び合つて行きたいと思う。

私は夫の脱サラ農業に従つて農村に入つて来た当時、友と呼べる人がいなかつた。若妻会に入る余裕もなく過われる四季の中で、いつも心豊かに暮らせる時代を持ちたいと思った。花に囲まれ友とたおやかに語り合う日、「仕事だけの人生では終わらない」と執念にも似た思いを胸に重ねていたものだつた。

就農時に連れて來た長女は親の苦労を見て農家には嫁がないと言つて看護婦になつたが、今は農業青年と家庭を持つてもうすぐ一人目の出産を迎える。

農村は人が人らしく暮らせる最

か、既存の枠にとらわれない伸びやかな発想で自分のしき生きたいもの。仕事一途の脱サラ農民だったが、後年は自分に向き合う時間大切にして、心にも花を咲かせつつ農村だからこそ味わえる生き方を探つて行きたいと思う。

平成7年1月19日～20日、札幌で開かれた農村女性フェスティバルで(中央が筆者)。◀



▶花をいっぱい育て、愛てる生活を!

土とペンで結ばれた農婦のネットワーク

回覧ノートの仲間たち

上村美智子さんとのことを知ったのは平成6年六月一八日付、北海道新聞「ひと・94」記事からでした。そこには、「学び心」旺盛でチャレンジ精神に富む人を讃える賞、「ま・な・び・す・と大賞」に、全国三九八〇編の応募の中から最高賞に選ばれました。それ以来、一度はお話を聞かせて紹介がされておりました。それ以来、一度はお話を聞かせてもらいたい、出来得れば本誌に執筆の無心もしたいもの、ただし、農繁期は極力避けてと思いつづけてきました。

この度、「じいろ豊かに『農』と親しむ」を特集するにあたりその念願が叶いました。メロンの苗立・作業や大震災の被災児童の「ファー」・ステイのお世話などの多忙を極めておられる最中に、電話や手紙でのやりとりに応じていただきました。

原稿と合わせて昨年発行された、「ともしび16年号・(愛称)北キヅナ」ノートA、B1用もお貸し戴きました。この回覧ノートは、「ともしび」の誕生日にあたる平成6年1月1日、上村さんの手元から南北一方向のそれぞれの仲間へ向けて出発し、巡回を終わり上村さんの手元に戻ってきました。

回覧ノートは、毎年一月一日に発行され、その時々のテーマについて腹感無く意見を出し合つてこれらました。昨年(一九九四年)は、「国際家族年」であったのでテーマを「夫婦」「親子」と決め、そのあたりなどにつづて、「北キヅナ号」でお互いがべんをとり合ひ、意見交換が行われました。一冊ともD5版のノートの余白を惜しむかのようじぶりしつとそれぞれの「じいろ」が書き込まれています。否、それどころかノートは普普通だつ

た時、驚嘆する覚えたあの「飛び出す絵本」さながらの写真あり、スケッチあり新聞・雑誌の切り抜きありといった楽しいものです。そして、それにも増して中に書かれている全国各地の農村女性の嬉しいバイタリティーには圧倒されそうです。

読者の皆様に実物はあらか、その全てをおつさざきないのはいささか残念ですが、上村さんのご内蔵を得ましたので、その中のほんの一部だけを転載させていただきます。（編集部）

・大分県 Aさん(58歳) 94年2月9日

立春を過ぎたといつのにまだまだ寒い日が続いています。別府の方は久しぶりに雪が降ったそうです。国東の方はチラホラと、それでも子供たちは大喜びをしています。テレビで北国の大雪を見ると「いいなあーあんな所で遊びたい」と言っています。

我が家は座敷では「お雛さま」を飾つて一足先に春です。昨年はこだごたしていまして節れませんでしたが、今年は新しいお座敷で一段ときれいに見えます。

〈回覧ノート〉『ともしひ16年号・北キツネ』より

・熊本県 Oさん(52歳) 94年2月4日

暦の上では立春を迎える。北国は何年ぶりかの大雪と聞きます。雪のない私達の所では想像もつかない大変さでしょう。今年は一度だけ雪が降りましたが全く積つたことはありません。我が家家庭のパンジー等はもう春ですヨとばかり咲き誇っています。チューリップ、ヒヤシンスもやがてつぼみが見えそうです。

いつも仲間のために楽しいノート感謝ですヨありがとう。今年は「ともしひ誕生日」が一番に着いて良い年になりそうな気がします。どうやら娘もおめでたのようですね。一週間もすればはつきりする事でしょう。いよいよ、先輩ばかりやんの仲間入りになりますで嬉しいですね。

今春は、私達にやう一つ嬉しいことがありました。農業功劳者で夫が地域功労賞を受賞、この10日に「コーオオタ」で同伴で表彰式があり出席の予定です。下さい、と言つて戴ける賞でもありますし、喜んで遠く戴きに参列します。

・愛媛県 Hさん(39歳) 94年3月16日

ともしひ16年、すこーい！頭が下がります。今朝早く東京のいとこから電話がありました。「米を買ひに行つたら列になつて並んでいたの、国内米ほしいんだけどなーい。」とのこと。こんな事態がやつて来るつて、本当に明日がわからない。今まで、日本が平和すぎたんだなあーつて、お金をどんなに積んでも、大切なものは何だろうと、改めて考えさせられます。

今、野菜作りに凝っています。ほんの二つの額ほどの畠ですが、種をまいたら苗を植えると、毎日畠を見に行くのが楽しみになります。土づくりが今ひとつなので満足なものは一つも出来ないのですが。人が訪ねてきた時は、それが笑い話の種になります。笑いなが

のいろいろ教えてやつたり、苗が余つてこる之間はせやのこじつ
つだらして楽しんでいます。歯医さんが往診の帰り家に寄つてしま
つた時、一向に太らないプロツコツの苗を眺めて、氣の毒に思
つたのか「これはアメリカの方を向いてあるぞ」の一言で大笑い
です。



▲発足して18年の「回覧ノート」。グループが意見を出し合ったノートも150冊
余りになった。

・京都府　Iさん　94年4月10日

桜の花も満開で、今を盛りのこの桜の花もやがてはハラハラと散
り染めし…細川サンの突然の辞任表明にも命のはかなさを感じてい
る私です。不平不満たらで毎日をタラタラと無意味に暮らしてい
る私だけど、このあたりで命のはかなさについて考える必要あり…
テスキ。たつた一つしかない命、毎日をわざとわざと大切に有効に
生きなければ…。深刻に思えてしあつ昨日です。有効に無駄な…
と叩かれど、健康で仕事をしていきたいとは、無駄ではなく有効に
過ぐしているところなのです。

・広島県　Mさん(42歳)　94年4月18日

春の気候を三寒四温ひばりとつたものじわ。そのへ、おといじ
は25～26℃もあるよい天気だったのに今日は、雨になつてしま
いました。まだ、我が家のことつが難せません。朝晩はりょくじゆ
要です。この雨で桜はたぶん散つてしまつてしまつ。日々はつづ
じやソノの色に染まっています。このといじの米不足とふうじゆ
今年の稻のへりは貢献に取り組みおしまひ…と、主人と話していわ
じじのです。今は畠つても兼業ですのに、やつせの手抜きになるか
も…。昨年父が亡くなつたので「あら」といは、やはり見落
じゆでしょい。でもまだ元気のいい田(77歳)がいるので少しは安心
です。

・北海道　Kさん　94年6月28日

大変大変申し訳ありません。長々と間ノート止めました。よつや
くお昼休みなどゆつくりぐんをもてる時がきました。3月中旬から
ずっと農作業が続きました。5月28日の雨の後、間に一度立たが10
分ほど、そして昨日(27日)半日の雨。雨なし／6日でした。
そして農休日も一回もあつまませんでした。北海道の農家は、雨の

日以外は働く／働くを徳ません／というのか、晴天の日に休むなんてとんでもない話／です。(田植えは雨でもしますが….)近所の人達も家族もみんなカラ梅雨で、つかれました。仕事は進んでいるけど…。今春は、田植え以外は人を雇用しませんでした。そのせいで忙しく働きました。雇用費をかけないということはこういうことかと、思い知りました。

そんな中での「工」「さん」の大賞受賞あめでとうございます。
「まなびすと大賞」…「工」「さん」の人生への受賞だと思います。
心よりおめでとう！と言いたいですね。

・和歌山県　一さん（44歳） 94年7月27日

今年の梅雨はカラ梅雨で、殊の外暑さ厳しく連日の熱帯夜・35度を超える気温にも体が慣れてきたと思つて、矢先、夏カゼをひきダウンをしてしまいました。一回間、主人と小4の息子が食事作りをしてくれましたので、大変うれしかつたし助かりました。家族つて有り難いです。主人は私の好きなもの、シュークリームや、卵豆腐、コマ豆腐、バナナ等買つてきてくれるし、やさしい家族を持つて幸せです。思いやりですね。

9日未明（現地時間8日午後）宇宙に飛び立った向井千秋さんが、無事、23日午後7時38分帰還され日本中が、いや世界中が喜びに包まれました。「地球を丸ごと見たい」夢を実現させ、心臓外科医から転身して9年、辛いこともたくさんあつたでしょうに何と素晴らしい女性でしようど、思いました。あのさわやかな笑顔がとても印象的でした。

・愛媛県　Tさん（46歳） 94年8月12日

毎日毎日本当に暑いです。台風7号が少し雨を降らせてくれただけど、その後は1～2回の夕立で、水不足が深刻です。四国は香川県

が大変。愛媛も松山市は断水していますが、私の住む町は、山があり緑が多いせいカ田舎なので今のところ水はあります。田んぼも今年はよく出来ているし、アゲツも今まで盆すぎにしか出していませんのに、7月末に少し出荷したら、やはり天候がよかつたせいでしょう。

・京都府　Yさん 94年8月27日

記録的な晴天続きもやつと落ち着き、少し秋りしづなつてきまと一週間ほどになってしまい、今追い込みの時です。今年は夏の異常気象で梨の出荷量も少なく早く終わるようです。果物類は、糖度が高く近年ない甘さだということです。

今、稻刈りのシーズンです。これから柿の出荷が始まります。道端に「スモモの花が咲き風に揺れています。娘の結婚式が10月8日です。タンスなどの荷を出すのが10月3日で毎日、何を持って行かそうかと頭を悩ましています。

・石川県　Sさん 94年10月13日

町の婦人会が企画した、秋の味覚巡りマキノクリ狩りとまつだけづくし・日帰り旅行に出かけてきました。いつもの年なら主人と小旅行を楽しむのですが、娘の出産予定が17日なので諦めていましたのに、このような企画が飛び込んできて思い切って参加しました。

さて、経済的な豊かさが人間の幸せとする社会全体の「一人」があります。人より優れた稼ぎ手になる為、親は子供の教育に熱心になり、人が生きるために必要な根本的な心を失いかけています。押し寄せてくる煩わしさや悲しみは私たちの生きている間はよけて通れるものではありません。そのことを真正面からアタック出来る努力と精神力を培う場所、それが家族であり家庭ではないでしょうか。私も人生五十年を乗り越えたのを節目に、また、おばあちゃんになるのを機に…自分を一步さがつて、冷静にみつめていける心の広さをもつて日々を過ごしていこうと思っています。

・ 岩手県　Oさん　94年10月15日

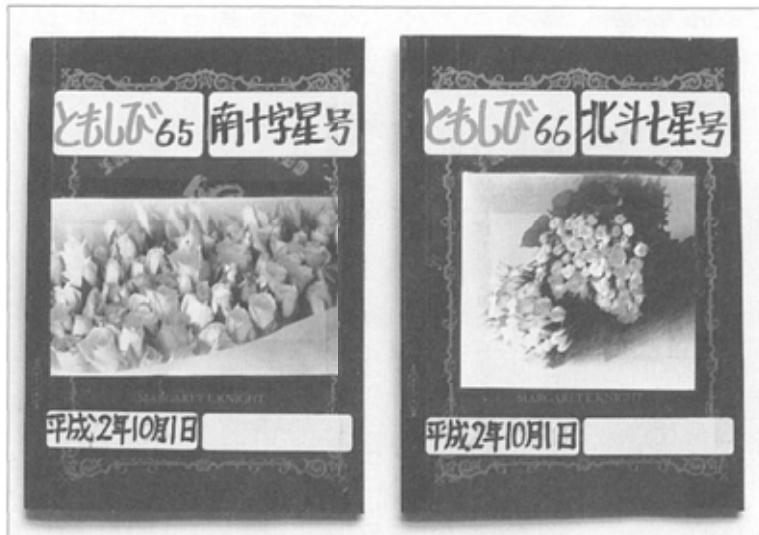
長女も嫁ぎ、次女も…。娘の幸せを願つて嫁がせる妹ですが、姉の家が二代目なのに對し、次女が嫁ぎ行く家は十一代続いた本家筋ですので、それなりの荷を背負うことになるでしょうが、相手(婿)が不足無い人柄なので、幸せになること間違い無さそうですが、手離してやる娘がいとおしくてなりません。新婚旅行はオーストラリアなそうです。豪華だと思いませんか。それとも今時、あたりまえだと思いますか。

・ 茨城県　Iさん　94年11月15日

北には雪の便りの聞かれる頃になつてしましましたね、今頃になると、まだ今年も終わってしまうとあせつてしまします。ノートが着いてから11月11日、12日と近所の友達と一緒に一日で熱海ヘツア旅行に参加してきました。六人なのでまとまりもよく、帰ってきて食事をしながら来年もまた行こうネ、親が元気な今のうちだものということに決まりました。のんびり温泉に入り、何もしないでいい旅は、行き先などないでもいいネという人はかり。箱根のあたりは、ちょうど紅葉していたし、富士山も素敵でした。

・ 神奈川県　Tさん　94年12月16日

12月になつたのに暖かい日がつづき、例年になく紅葉がきれいです。反面、いつまでも葉が落ちないので、「お正月の支度が出来ない、植木屋さんに来てもらうのを延ばした」と言う友もいます。



▲「回覧ノート」は、北から回るノートと、南から回るノートの2冊が発行される。

ノートが届いた日、「我が家に嬉しいニュースが入りました。長男夫婦に子供が出来たとの知らせです。待ちに待った知らせです。主人と一緒に手を取り合って喜びました。

・新潟県 Mさん 95年1月2日

あけましておめでとうございます。皆さん新年いかがお過ごしでしょうか？ それぞれにいいお正月の過ごし方をされていることだと思います。私といえば、お正月に大掃除をしています。暮れまでになんとかやれるだけの仕事をし、やつとゆつくり掃除が出来る状態なのです。三箇日は来客がないので本当にのんびり出来るのです。この三箇日の間にできるだけ自分のやるべきことをこなすか…時間の経つのも忘れてやっています。時々「うるさいからやめてくれ…」なんて声も聞こえますが、やるからにはトットンやらなければ気が済みませんからね。

今年も一年がバタバタ過ぎてじいじょうな気がしますが、それが自分にとって充実していれば幸いと思っています。最近地震が度々ありましたがその地の方々は大丈夫でしたか？ 大きな災害がなければ…来なければと願っています。防ぎようのない自然災害は本当に怖い、恐ろしいものですよね。当地は今、無雪状態ですが、例年1月から2月にかけて降雪がありますので大雪にだけはならないでほしいと思っています。

・和歌山県 Tさん(50歳) 95年1月18日

兵庫県南部地震が起きました。M7・2大変な被害が発生しました。戦後最大の地震とか、都心部で集中的に被害が大きくなっています。被災者の皆さんのお見舞いを申し上げます。頑張ってください。

・千葉県 Sさん(29歳) 95年1月31日

元旦は、親子で過ごしました（いつも大家族の中ですが）。長い砂浜が続く九十九里海岸にて、すばらしい初日を拝みました。今年も、一年無事で過ごせるように願いました。年末に起きた三陸はるか沖地震のことが頭をかすめていましたが（八戸付近に友人が三人います）…どうやら大したことはなかつたようで安心してました。しかし、地震は益、正月関係なしにやって来る。1月17日の大震災は日本中の人々を震え上がらせたことと思います。知人の家はガス、水道が止まり「今にも家が壊れそうだ」と、先日やつとつながった電話で言つておきました。遠く離れているし力になれないのがつらいです。

今度は関東だ…と囁かれてる中、不意を衝かれだように関西地方で起こつてしまつた。そもそもこちらも危ないようなので気をつけないと…。でもこればかりは、いつ来るかわからぬだけに、毎日レクンヒンしています。いくら関東地方の人は地震慣れしているとは言え、「さとなる」というなるか…。タバコを（金貰で）止めたり、高いところの物は立つける、懐中電灯は名部屋ひとつ、etc…。ああ…恐ろしい…の厳しい寒さの中、不自由な避難所生活をしていかなければならぬ人達のことを考えると貧乏は禁物…今、こうしていられることに感謝しなくてはと思ひます。小さなことに、ハラを立て不満を思つことは、とても愚かなことなのだと反省しています。

・徳島県 Oさん 95年2月11日

久しぶりの「ともしびノート」懐かしく読んでいます。阪神大震災…あんなにしてきだつた、あの神戸が見るも無残な焼け野原となつてしまい、被災された多くの人たちの日々を思うと飛んでいつてお手伝いしたいのに、出来る」とは募金くらいです。

今回いろいろな人々が助け合う姿を見たことはありませんでした。被

害をつけ家が壊れている人たちさえ、他人を助け、また、ボランティアも多くの生まれました。次男（23歳・関西電力勤務）も「こんなに恐ろしい光景を見たのは初めてだ。つらい、本当に気の毒でつらい」と。口の重い子ですが「自分たちは元気だから、とにかくが

んばって少しでも手伝いをしたい」と言っています。…今年は、一月から大変なスタートですが、みんなで頑張って早く復興するよう祈るのみです。

「ともしひ会」のネットワーク

北海道 6
東北 3
(岩手 2 山形 1)

関東 9
(栃木 4 埼玉 1)
茨城 1 群馬 1
千葉 1 神奈川 1

信越・中部 5
(長野 1 新潟 2)
岐阜 1 石川 1

関西 5
(京都 2 兵庫 1)
和歌山 2

山陽・山陰 4
(広島 1 鳥取 2)
山口 1

四国 3
(徳島 1 愛媛 2)

九州 7
(福岡 1 佐賀 1)
熊本 2 大分 2
宮崎 1

土とペンで結ばれた仲間たち42人

ブラジル アマゾン 農協調査

北海道大学
大学院
田中規子
農学部

昨年の八月末から九月いっぱいにかけて念願のブラジルアマゾン農協調査を行った。本文はその調査についての隨想である。

私のアマゾンに対する想いは高校時代に遡る。当時のNHK特集中、アマゾンの熱帯林が焼き烟によって乱開発されているとの番組が放映されたことがある。テレビの中のアマゾンの空撮はとても美しい、私はその美しさに魅了されてしまった。その映像は、熱帯林の減少がとても憂うべき事態のように思われたのである。そうしてアマゾンの光景は私の脳裏に留まり、漠然とではあるが理想的なアマゾンの農業「開発」とは何かという疑問が芽生えたのである。そして、アマゾン農業を支える組織として協同組合の可能性を追求したかった。

今回、調査に選んだトメアスー村のトメアスー総合農業協同組合（以下CAMTA・注1）は、ブラジルアマゾン地域に属す。ブラジルのアマゾン地域はパラ州、アマゾナス州など二〇州（注2）からなり、トメアスーはパラ州

にある。州都ペレンからは車で四～五時間かかるアマゾンの「奥地」である。今でも熱帯林の陸の孤島である。途中アマゾン川によつて道路が分断されているためバルサと呼ばれる河渡しがある。これは一時間に一回運行、河渡しの所要時間は一五分である。このため、それより「奥地」は道路も未舗装で物流など著しく遅れている。トメアスーの場合それゆえの「奥地」といえるだろう。

トメアスー村は一九一九年、鐘ヶ淵紡績が田舎となつた西大拓殖株式会社によって開拓された。アマゾンの日系移民はここから始まつたのである。当時のアマゾンは伝統的な或いは粗放的焼き畑農業しかみられず、農業開発、特に農法的に著しく遅れていた。そのようななかで、どのような作物が栽培できるのかも分からず開拓が始まられた。それは苦闘の道のりであつた。商品作物の栽培に失敗し、さらにはマラリアなど風土病も猛威をふるつた。マラリアでの死者は相当な数で、棺桶をつくつ



▲河渡しのバルサ

てもつぶつても間に合わなかつた
といつ。そして一九三五年には南
拓の經營は完全に失敗し、入植者
を残してアマゾンから撤退したの
である。残された人々は協同組合
に力を結集して生き延びるほか手
だてはなかつた。この協同組合は
南拓撤退の三年前に設立された野
菜の販売組合である。南拓の指導
した力カオ栽培に見切りをつけた
入植者は、ペレン市で野菜を販売
して生活の糧を得ようとした。当
時のブラジルでは野菜を食べる習
慣がなかつたため、売りながら食
べ方を説明し、売れ残りは施設や
軍隊に寄付した。それから数年間
は野菜の生産販売が主であつたが
一九四〇年頃から徐々にコシヨウ
の生産量が伸びてきただのである。

このコシヨウ栽培の成功こそが
トメアスー村の窮状を救つたので
ある。さうに戦後は、東南アジアの
コシヨウ輸出国が戰禍で輸出量が
大幅減少したため、コシヨウの價
段は数十倍にはね上がつた。こう
して迎えたコシヨウブームによつ
て経済は潤い、トメアスーは「シ
ヨウで熱帯農業の成功を収めた。

てもつぶつても間に合わなかつた
といつ。そして一九三五年には南
拓の經營は完全に失敗し、入植者
を残してアマゾンから撤退したの
である。残された人々は協同組合
に力を結集して生き延びるほか手
だてはなかつた。この協同組合は
南拓撤退の三年前に設立された野
菜の販売組合である。南拓の指導
した力カオ栽培に見切りをつけた
入植者は、ペレン市で野菜を販売
して生活の糧を得ようとした。当
時のブラジルでは野菜を食べる習
慣がなかつたため、売りながら食
べ方を説明し、売れ残りは施設や
軍隊に寄付した。それから数年間
は野菜の生産販売が主であつたが
一九四〇年頃から徐々にコシヨウ
の生産量が伸びてきただのである。

しかし、そのCAMTAは最近
経営が芳しくないと聞き、今回の
調査の目的はCAMTAの現状を
知ることだった。

サンパウロ、ブラジリフを経て
ペレンについたのはもう九月の半
ば過ぎだつた。河口の街ペレン市
は人口一十九万人のアマゾン地域
最大の都市である。こゝは様々な
アマゾン川沿岸の産物が集められ
売買される場所である。市場には
大ナマズ、最大の淡水魚ピラルク
、様々な熱帯果樹、それにアマ
ゾンで捕獲されたナマケモノやオ
ウムまで売られている。こゝに来
ればアマゾン上流でなにが捕れる
のか一目瞭然である。また、この
街は河口であることから輸出港も
有している。一九世紀の「ココ」一



▲健康な成木のコショウ園

「時代にはアマゾンの天然ゴムはここに集められ、そして輸出されていった。今はトメアスーのコシヨウもここから北米へ輸出されている。トメアスーにとって重要な市場であるばかりでなく輸出拠点でもある。

ここからトメアスー村へはバスで向かつた。ジャイカベレン支部の須藤さんの見送りを受け、午後二時頃トメアスー行きのバスに乗り込んだ。ペレンをでたときは雨は降つていなかつたが、郊外でると降り出した。例年通りだと九月は乾期の真っ最中だから雨は一滴も降らないはずだが今年はまだ毎日降っているという。アマゾンも異常気象らしい。夕方には前述のバルサの所へ着いた。その頃には雨は上がりついた。簡単な店で椰子の実ジュースを飲みながら次のバルサが出るのを待つこと一小時間。夕涼みをしながら待つが、さすがに時間を持て余す。バルサが出た頃はもう本当に暮れかかっていた。この様な中距離バスは非常に安いので、利用者は地元の人々や労働者風の人達が多い、

まず外国人旅行者が乗つてくる代物ではない。この路線は金持ちの乗るバスではないから、まずないと思うがバスジャツフもよくあるらしい。そのうち、全く夜になり、バスは轟音をたてて真っ暗な熱帯林の道をモウモウほこりをたてて突き進んだ。結局到着したのは夜一〇時、心細かつただけに出迎えがとてもうれしかつた。

次の日、トメアスー農協へ行つて私はショックを受けた。なんとつい二ヵ月前に農協が潰れかかっていたのである。その要因は主に三点ある。

一つはインフレである。ブラジルのインフレはすさまじい。八〇年代に入ってインフレは高進し、八〇年代後半から九〇年代にかけては月四〇%～八〇%、年間一〇〇%を超えるインフレだった。まだ、慣性インフレとも言われてあり、その証拠にブラジルの公衆電話では、一〇円玉の代わりに、フィッシュヤとよばれるコインを購入して使う。なぜならインフレで料金や貨幣が代わる度に、公衆電

▲熱帯果樹のマラクジャ



話のコイン投入口を変えるわけにはいかないからである。タクシーに乗るどメーターの料金換算表が用意してある。相手が外国人だと解ると、知らないと思って騙す運転手もいる。しかしそんな中でブラジル人は平気で暮らしている。ブラジルでは、「インフレ文化」といわれるほどインフレートでの生活が染み着いている。

それには、情報や経済の動きに機敏に反応し、インフレを乗り切るテクニックが必要とされる。トメアースー農商の経営陣は一世が多く、日本人には、そのようなブラジル的感覚が身についていないかつたようである。そして、期を逸するとそれだけで大損を被る。

第一に政策的原因である。主にここで関わる政策は農業融資政策と協同組合政策である。政府の農業融資額は八〇年代後半から削減されはじめ、九〇年に大統領に就任したコロル政権下で著しく削減された。これは、インフレの主要因の一つと考えられている財政支出を抑えるためである。このためコロル政権下では農業融資が一番

の槍玉に挙げられたのである。九年の融資額は八九年の五七%にすぎない。

まだ農業融資には利子フライスインフレ価値修正がついている。そのため、八〇年代末からの高インフレ下ではものによつては「一年で借りた額が五〇倍になつた」という話を聞いた。この融資で借金が返せなくなり、出稼ぎへと出向いた人々も多かつた。

CAMTAでは、組合員への貸付や保証人を安易に行つていただき、CAMTAもインフレで雪だるま式に膨らんだ負債を抱えてパンクしてしまった。この安易さは七〇年代の農業政策を考えるとうなづける部分もある。この期には、利子は比較的高く設定されていたが、インフレに対する価値修正がついてなかつた。そのためインフレ下でどんどん借りた額は目減りしていくのである。大型トラクターを買うために借りた金額が、数年経て返すときにはタバコ一箱代にも満たなかつたといつ嘘のような話がいたるといひで聞かれ、昔は良かつたと農家はいつ。



▲熱帯果樹のアセロラの木

この記憶が、いつか政策が代わつて戻くなると楽観視させる。七〇年代はインフレを容認しても経済成長を促進する政策をとつていだのである。つまり、大きな財政支出によってインフレが起つても、それ以上に経済成長すれば良いというものだつた。七〇年代はそれによって高度経済成長を遂げだし、農業融資額も膨大だつた。しかし、八〇年代後半以降は野放しにはできないほどインフレは高進し経済も停滞している。

ブラジル農業政策局の中には農業協同組合部があり、「農協力」の意見を取り入れながら農協と共に歩み、農協を支援することによつて農協が農業のエージェントとして活躍することを期待する」と、部の目的を農業協同組合部のウルフ氏は語つた。

実際、協同組合部では、開発政策の担い手として協同組合を設定し、低利融資を行つてゐる。しかし、金額的には非常に少ない。また、日本の農協のように税制優遇がない、ブラジルの農協はあくまで自由競争下にあがれでいる。支

援はするが、保護はしない。このように高インフレ下で「パジル協同組合をとりまく政策的背景は厳しいものがあつた。

第二回、主作物であるコシヨウ栽培の停滞である。コシヨウ栽培の成功によつてトメアスーの熱帯農業は成功したかに見えた。しかし、それには大きな欠陥があつた。コシヨウに病害が蔓延したのである。コシヨウはもともと蔓性の植物であり、日陰を好み。それを曰当たりの良い場所で栽培すれば、

初めのうちは単収はあがるが、弱い成木をつぐつてしまふせいだとも言われている。また、化学肥料の多用のせいとも言われる。いずれにしても熱帯農業としての農法的欠陥の発露といえよう。この傾向は六〇年代の後半からみられたが、いまだに未解決である。

また、コシヨウ栽培に見切りをつけようにも適作物が容易に「発見」できない。野菜など、ベレン市場むけは近郊農家との競争に破れていった。八〇年代後半からは熱帯果樹を中心としたジユース生産が始められたが、生産もCAM



田中 規子（たなか のりこ）さん
1967年京都市生まれ。1991年酪農学園大学酪農学部卒業。1993年北海道大学農学部大学院入学。現在、同学部大学院在学中。



TAの販売も軌道に乗っているとは言い難い。本当にアマゾン農業の難しさを思い知らされる。しかし、アマゾンの農業者は生産においても販売においても遅くあらゆる方法を試みている。そのような人々が、インフレ下で経営に失敗したCAMTAを見捨てようとしていることも経営危機の要因であつた。

経済の安定しないブラジルで、しかも政策のバツクアッブがない状態で協同組合を經營するのは難しい。加えてアマゾン農業の難しさは容易には解決できない。

しかし、明るい材料がないわけではない。第一に、熱帯果樹についてはCAMTAが販売戦略において失敗していただけ成功には至っていないかつたが、販路があり、栽培方法にも大きな欠陥があるのではない。第二に、インフレは九四年の選挙で選ばれたカルドーソ大統領がアルランを九四年七月から行い、それによつてインフレがあさまつてゐること。第三に、CAMTAの経営陣である理

事は七月の経営危機に入れ替わり、日系一世、準一世の理事を多く用し経営陣の若返りを計つたことである。

私は、どういうわけだかアマゾンへ行くたびに好きになる。強い日差しの中でも木陰は涼しく、川辺でほんやりしていると青や黄色に光る蝶が舞う。「メアリー村はアマゾン河でも白い砂と澄んだ水面をただえる所である。夜になると日本の秋のように虫が声を震わせ、昼間の暑さが嘘のようになる。アマゾンが乱開発を免れ「持続可能な農業が行われることを私は願う。

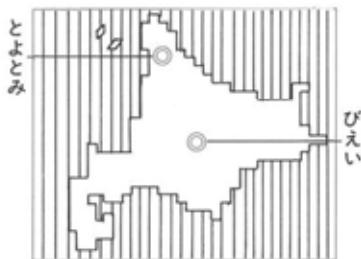
(注1)ポルトガル語の正式名称は、COOPERATIVA AGRICOLA MISTA DE TOME-ACUで、これを略してCAMTA(=カント)と呼んでいる。

(注2)アマゾンの地域開発推進政策のため、「法定アマゾン」地域が定められている。

北部のパラ州、アマゾナス州、アマパ州、ロライマ州、アクレ州、ロンドニア州と中西部のマトグロッソ州、トカンチヌ州、北東部のマラニオン州からなる4,906,784km²の地域を指す。

あのマチ・地域おこし活躍中 NO.3

連載



豊富町の事例

地域のキヤツチフレーズは 「花と酪農と日本最北の温泉の街」

地域の概要

豊富町の農業は、明治三六年に初めて開拓の歴があつされ、幾多の変遷を経ながら、昭和四五年以降は酪農専業に転換し、西天北農業地域の拠点として発展しています。

日本最北の地権内幌延町、東は猿払村と、西は日本海に面しており北見山脈を源とした河川は中央の低湿地を流れるサロベツ川に合流し、海岸地帯を迂回しながら天塩川に注いでいます。

農耕地は、河川の流域を中心に

開拓され、丘陵地は洪積の粘土質で、平坦地はサロベツ原野の高、中、低位泥炭土が大半を占め、一部、日本海に面した地帯は砂丘地帯となっています。

このように、低地は泥炭地、丘陵地帯及び傾斜地帯のほとんどが強酸性の重粘土壤で、しかも気象的には、横雪冷温地帯に属し農業の立地としては厳しい条件下にあり、発展が阻害されてきましたが、昭和四〇年代後半より寒冷地に適した酪農經營に転換したことを契機に、農業經營の安定化が進められました。

観光資源

利尻・礼文・サロベツ国立公園に位置する豊富町は、数々の景勝地があり、四季折々の色彩豊かな大地が観光客を魅了しています。

○サロベツ原生花園周辺

(図-1)

豊富町・人口の推移

年度	町人口(人)	農家人口(人)
平成元年	6,142	1,383
2	6,090	1,356
3	6,055	1,345
4	5,890	1,288
5	5,777	1,232

る豊富温泉は、大正一五年石油試掘の際、天然ガスとともに湧き出た温泉で、利尻・礼文・サロベツ国立公園の周遊基地となつてあります多くの観光客が訪れます。

また、周辺にはゴルフ場、スキーフィールド、綿羊牧場、大規模草地牧場などもあって、北海道の雄大さを満喫できます。

○兜沼公園周辺



▲豊富町農業振興計画現地検討会(平成5年4月28日)

豊富市街地より北方約一三畳にある兜沼公園は、名前の通り兜の形をした湖沼で、渡り鳥の休息地となっています。

このように豊富町は、酪農を中心として、周辺が観光と温泉、酪農と漁業や林業といった一次産業が中心の町です。

振興計画の主要課題

豊富町の酪農形態は、農地のほとんどが特殊土裏という劣悪な条件下にありながらも広大な土地資源を背景に農業構造改善事業等の実施により草地の改良、酪農施設の拡充や農業機械の大型化により経営の規模拡大が図られてきました。

ところが、生乳の計画生産や個体販売価格の急下落など輸入自由化に伴う急激な国内外の農業環境変化によって、経営の安定化にかけ取り組んできた計画は大きな打撃を受け、規模拡大のための投資

金の償還に苦しむ農家も少なくありません。

りません。

こうした農業情勢と農家経営を考える中で、豊富町の農業振興に関する今後の方針について、新時代に即応した農業の確立を目指して、これまでの実績推移と組合員意向調査をもとに将来展望を抱いて行くため、過去数次にわたって策定した農協の中期五カ年計画の推進経過を踏まえ新たに農業振興計画を策定するものです。

計画が目指す将来像

抑制的な計画生産の今日、酪農経営の安定的発展を図るために再度原点に立ち返り、徹底した生産コストの低減と生産性を高める技術を導入して、高収益生産体制の整備と良質粗飼料生産を基盤とした草地型酪農を確立することにあります。

(図-2)

豊富町の土地利用

地目別	面積割合(%)
山林	31.1
牧草地	27.3
原野	21.3
沼地	0.8
宅地	0.4
その他	19.1

(図-4)

豊富町生乳生産の状況

年度	生乳生産量(t)	一頭当たり乳量(kg)	一戸当たり販売高(千円)
平成元年	46,969	6,359	23,913
2	47,696	6,355	22,845
3	49,986	6,410	21,801
4	52,172	6,496	23,130
5	66,501	6,873	24,181

(図-3)

豊富町農業の概要

年度	耕地面積(ha)	乳牛総頭数(頭)
平成元年	10,670	12,804
2	11,042	13,518
3	11,101	13,742
4	12,123	14,250
5	13,848	14,112

このことを通じて、やとらの農家生活と離農のない活力ある農村社会の形成を目指して、豊富町酪農の望ましい経営形態は何かを提言することとしています。

美瑛町の事例

波のようになだらかな丘陵が続く美瑛町には、その風景の美しさから「丘のまちびえい」のキャッチフレーズがつけられています。

美瑛町の概要

美瑛町は北海道のほぼ中央、上川支庁管内の南部に位置し、東西四四km、南北一六kmに広がり六七、七〇〇haという広大な面積を有しています。

しかし大雪山系十勝岳連峰の山麓であるため山林原野等が八〇%を占め、農耕地は一〇%弱となっています。地勢はあおむね波状丘陵で、畠のほとんどがここにあり、その丘陵の間をぬつて美瑛川、置杵牛川、辺別川が流れ、この流域が水田となっています。気象は内陸性で寒暖の差は激し

いものの農耕に適し、観光・レジャー施設への道路も完備されていて、なだらかな丘陵や森林、十勝岳連峰など刻々と変わる雄大な景色を眺める絶好のドライブルートにもなっており、健康的で豊かな自然に恵まれた町としての環境が整っています。

美瑛町の歴史は明治二七年の入植から始まります。

この時の人口はわずか一〇人でしたが、富良野線の開通とともに人口が急増し、昭和二五年には二万人を超えて、昭和三五年をピークにその後年々減少傾向を辿っていますが、それでも平成二年初では農業関係に従事する人の割合は、

美瑛農業の構造

生産性の高い農業経営の実現を図るには、農業構造の再構築が不可欠であるとの視点から、美瑛町農協では「地域農業の振興計画」を策定し、これまで昭和五五年の第一次計画から第四次計画までを

終了し現在は第五次計画を推進中の段階にあります。この間、生産基盤の拡充や作物別生産部会活動の促進、加工調整施設の整備など総合的な生産性拡大を図ってきた結果、一戸当たり農家所得は全道的にも高い水準まで向上し農家のためまぬ努力の結果が現れています。



▲美瑛町全景

(図-1)

美瑛町人口の推移

年度	町世帯数(戸)	町人口(人)	農戸数(戸)	農家人口(人)
昭和50年	4,287	14,826	1,265	5,851
昭和60年	4,191	13,975	1,059	4,726
平成2年	4,027	12,669	941	4,211

平成五年時点での作物別の農業粗生産額は畜産をトップに野菜、豆類、ばれいしょ、麦類、米、てん菜がそれぞれ一〇億円以上とな

っています。

特に、野菜などの導入による複合生産体制がここ数年で着実に確立されてきているようです。

複合経営農家の占める割合は五〇%を超える生産額の増大に結びついていると言えます。一方、農業構造の推移を辿ってみると、実

営農戸数では昭和六〇年の九九一戸から平成五年で七五〇戸と減少し、專業・兼業割合は昭和六〇年に専業比率八〇%であつたものが平成五年には九三%になつています。

また、高齢化はここ十数年間で

急速に進展し、六〇歳以上の経営主における後継者不在率も高く、專業農家における高齢化、後継者難と労働力の確保や効率的生産システムの確立が大きな課題になつてきました。

農家戸数が減少する一方で経営耕地面積は増大しており、また高齢化や後継者不足から所有する農地の売却処分を望む農家と、拡大を望む農家が多く見られるようになり、農地の流動化も規模拡大の方向で進んでいます。

また、農地の流動化は近年、農業環境の悪化から投資に対する抑制的傾向が強まつて、農地取得は停滞気味で農地価格も低落傾向にあります。取得の形態も購入より借入による規模拡大指向が強まつています。

振興計画の主要課題

全道的な問題ですが、美瑛町でも高齢農家の後継者不在、労働力不足、離農の増加などによつて農地の放出が将来益々増大することが危惧されています。

▲美瑛町庁舎

これら放出農地の効率的な利用の役割と連携がどうあるべきなの

(図-2)

年度	美瑛町の耕地面積				(単位: ha)
	総耕地面積	水田	普通畠	草地	
昭和50年	10,770	2,880	6,270	1,390	
昭和60年	12,400	3,190	7,880	1,340	
平成2年	12,700	2,440	8,840	1,410	
平成5年	12,110	1,420	6,020	1,570	

(図-3)

年度	美瑛町の主要農作物作付状況					(単位: ha)
	水稻	豆類	馬鈴薯	てん菜	麦類	
昭和50年	1,267	2,561	1,744	860	518	
昭和60年	1,490	2,240	1,820	912	2,450	
平成2年	1,250	2,019	1,520	1,072	2,980	
平成5年	1,430	1,560	1,490	1,190	2,650	

カをテーマに、調査・検討を進めています。
(レポーター 地域農業研究所 専任研究員 河村 彰仁)

解 説

北海道農業研究会・(社) 北海道地域農業研究所・共催

酪 農 研 究 会

講 演

『酪農の経営問題』

酪農家（中標津町農業協同組合組合長）三友 盛行

平成7年3月9日・北海道大学農学部会議室
(講演の一部を収録し掲載いたします)

酪農への入門！

おはようございます。中標津の三友です。こういう集まりは初めてあります。大学という門も初めて潜りました。いつもと場違いかなと思います。こういった一農家が話をする。このことの異常さということを、まず第一番に考えてみたい。異常というか大変不幸なことなど正直言って思うのですね。何故かというと、僕は基本的に中標津の山奥で酪農にいそしむ。これがいい時代だったと思うのですね。僕に言わせれば、ただただ前に酪農をやつてきた。そこにライドが当たり地域そして道内、まさにそこへそして府県に連れられて行かざるを得ない。引っ張り出されざるを得ない。そういう時代なのかなと思思います。そういう時代に、酪農家もまた今日お集まりの皆さんも立ち合わされているということだろうと思います。

今日は、酪農の経営問題が与えられたテーマですから、僕の経営問題あるいは酪農に対する酪農家としての見方についてお話ししたいと思います。自己紹介をさせていただきます。僕は昭和20年東京の生まれです。中学の時に理科の授業で、東京に住んでいる人間は都会しか知らない。そして人の生き方には、あるいは仕事の中には農業も林業もあるのだということを初めて知りました。

それまでは東京の人間は東京にしか住めない、日本中が東京だという認識でした。そんな時に、地方があり農業があるのだということを教えられまして、ぜひ都会以外で暮らしたいと思った。都会の人間が農業を志すと言うことは、まず農業部に行かなければいけない。それしか思いませんでした。農学部へ行けば、たとえば北大なり、それなりに行けば農業者になれる。そんなことを志してきましたので進学高校に進みました。それで進学の競争に馴染めないと、ここで止めようということになった。そして、いろいろな仲間の議論の中から、一人だけで、はみ出していく人間がいてもいいのじゃないかという経緯がありました。酒の勢いも手伝いましてみんな手を挙げましたが、最終的に実行したのは僕だけでした。他の友人は最終的には進学してしまいました。

さて、これから農業を志すのだけれど、その前にいろいろな所へ行ってみたいと思い、一年ほどかけて日本一周の無銭旅行に出かけ

三友 盛行（みとも もりゆき）さん

〈経営規模〉面積45ha 成牛40頭
育成牛 10頭 乳量220t

〈主な著作〉

「北海道・根室酪農における規模拡大の問題点と転換の方向」
（「デーリーマン」1993年2月～3月号）「提言 持続的酪農の条件と将来への視点」（『酪農ジャーナル』1994年5月号）
「風土に生かされた酪農への道案内①～②」（『現代農業』1994年5月～95年3月連載）



ました。その時に、北海道の「バイロットファーム」へ行きました。当時、昭和四〇年ですが、その地と東京との落差に非常に驚きやしました。しかしながらそこに暮らしている日々。これほど素晴らしい生き方、日々の暮らし方があるものだらうかと若いこともあって非常に感動しました。ここに住もう……決めました。

そこで実習している時に、別に入植地があるということが分かりました。僕は、日本の開拓行政の最後の開拓者です。ですから、開拓者承継資金というものを借りて、第二次構造改善事業といつものに乗つて入植しました。そして、僕が入植してから日本の北海道における開拓行政は一応収束したということです。ついこの間まで開拓者承継資金を支払つてありました。

そして、入植の条件は妻帯であるところです。すぐに東京に引っ張り幼なじみの家内を口説きまして、「お前が農家をやりたくない」というのであれば、「すぐ」でも止めね」という条件で入植しました。しかし、その条件は未だにやつてしまわん。いま内は、家で二五頭の搾乳牛を相手に留守番をしています。

○成立過程

入植をして、人並みに借金をして、借金を返すために夢中になつて働く。その働いている間に借金をする。気がついた時、昭和五六年には四、五〇〇万円ほどの借金が残つていて、そういうようなことで、そこから今、僕がやつているような酪農が始まる訳です。

酪農経営の問題点

僕の酪農の経過は、実は日本の、北海道の酪農の歴史とかなりの部分で重なり合うのですね。昭和一九年に酪農振興法・集約地域の指定がありました。そこからが近代酪農の幕開けだと僕は思っています。ついで二三～三四年に、バイロットファームができる。僕は四年に入植します。この酪農振興法ができた時に関連して今日お話をしたい最大のポイントは、酪農振興法の精神です。

酪農振興法の精神は「急速な発展を目指す」とはっきりと書いてあるのですね。急速な発展が、実は今日の酪農のいろいろな問題を基本的に作り上げているといつこじです。

この急速な発展をどうやって目指すかというと国費の投入です。

●ゴールなき拡大

問題は、昭和五五年を過ぎてなかなか拡大していくことに、今日の拡大の問題がある。どうしてなかなか拡大をするか。昭和五四年の生産調整が一つの軸ですが、この生産調整下で何を行つてきたかというと、一頭あたりの乳量を増やして生産調整を乗り切ろうと

もう一つは、農家の立場で言えば「負債」と書かなければ。急速な発展をするために、生産力を上げるために、負債をむるところです。北海道酪農の原型的なむち個人農家の八九割は、酪農をするところではあるいは入植をするところでは、負債をするということと同義語だということですね。

殆どの人方が自己資金で酪農をするところとはあり得ない。基本的に酪農を始めるということは負債を背負うということなのです。だから、負債を背負うということは悪ではないのです。善なのであります。僕は、ただ夢中になつてあくせく働いて、生産を拡大すれば借金が払えると思った。気がついた時には借金が四、五〇〇万円。これが根拠の一つのバーンになる。

だから、未だに負債というものの意味や重さというのはそれほど感じていない。経営上収支を合わせることは重たいんですけど、負債を背負つた時の意味合いについては、基本的に認識は薄い。この様に負債をするところはつづての抵抗感がない。そして、農協からの繋りを示され、「一億円だも」と「二億円だも」など、「三億円だも」と言われたら、僕は酪農をしなかつたと思う。結果として「一億円だ」。一億円は経営収支の問題、あるいは過剰投資の問題です。

この様に急速な発展をやるために、国と個人がこういう形で出発したということ、この経過の中でなお規模拡大をして來ているということがあります。昭和四〇～五六年までの間までの規模拡大（はじめの生産調整の時期まで）と、その後（五六年以降）との拡大とは、全く意味が違います。入植をして始めた人が四〇～五〇歳くらいの土地を持ちますが、全部が草地といつ訳ではない。昭和五五年くらいまでは機械化へ移行する中で自分の持つている土地を開墾する、草地化する。五〇年に相応しい拡大をする。「このまでの拡大は、適正だと思う。これまでの拡大は農家からみればできるだけ早くやつた方がいい。当然、借金で始まっていますから。



▶三友さんの堆肥

いうことになつてきました。と同時に田が強くなつて穀物が輸入し易い環境も整つてきました。一頭あたり牛乳をより多く搾るということは、固定費は一定ですから変動費だけが増える。その変動費はおかだ飼料代ですが、乳代が変動費を上回れば生産調整期における一つの生き残りの方法論としては有意義だった。

ところが一頭あたりの乳量を高めていくことでも、当然限界があるのですが、その限界を超えてしまった。「いわゆる高濃乳化が始まってしまった。昭和五年くらいまでの拡大と、それ以後の拡大の区別が、農家も本日この会議室にお集まりのみなさんも、きちんと付いていないかなと思います。

僕は四、五〇〇戸田の借金が溜まつてしまつた。当時は特別ない入れはなかつたが、いま思えは入植した時に、「二つの夢があつたのですね。これが大事だと思うのですが……」一つは燃えるマキを持ちたいということです。良い農家は必ず前年の年にきちんとマキを積むことができる。我々のような駆け出しの農家は、生木を切つて来てそのまま焼く。生木は非常に効率が悪くて、ジユウジユついでいるうちに何も無くなる。燃やすのも大変だ。農家の昔からの夢は、よく燃えるマキをきちんと一年分蓄えておく。これが一つの大なる夢です。もう一つは、牛に馬一匹工事を食わせたい。これだけです。僕は今もこれだけなんですね。このことが実現すれば、いろいろな部分が整理されて、農家生活の水準も上がつてくるということです。

隧道に流れますけど、石炭と灯油を焚くようになつてから農民は成長が止まつてしまつた。便利ということは人を成長させないわけですから。スイッチを入れてボイラーが燃えるという発想と今の規模拡大は全く同一線上にある。灯油がなくてボイラーの調子が悪いと修理しないで入れ替える。あるいは灯油のないことを嘆くということになつてきます。

それと、牛に草を覗くやつだ。覗く一杯やつるとやはり五〇戸にふさわしい頭数しか飽きない。どうして覗く一杯やつといふと急速な発展のために草地基盤と牛の頭数が合わなかつたのですね。常に、常に、牛を増やしてきましたから。ようやく牛も施設も草地も一つのフローで拡大が終わつた。そして覗く一杯やつ。覗く一杯やつは化成肥料も配合飼料もそんなにたくさんやらないてもいいのではないかといふ気がしてきました。たとえば、一番草に一袋、一番草に一袋というのが一つの教科書ですかう教科書通りにやつた。それを少しつつ減らしていく方向に変えました。

それともう一つ、僕は怠け者ですから、毎年、毎年堆肥を撒くことは大変だということになります。堆肥を三年ほど置い。三年目の春に撒くわけですが、そうすると一年目と一年目の春には堆肥を撒かなくていい。その堆肥を切り返して行くが、このことが、僕の春農を一番成長させたとも思うのです。ぶりまで減らしていくことができるのか。これは大きな興味でした。

堆肥を作るという作業ですが、今は殆どの農家が堆肥を作るのを放棄しています。今は産業廃棄物ですから、いかに効率よく捨てるか。それをやつているが、最初はいい堆肥はなかなか出来ない。いい堆肥を作るためにはどうするか。あるいはどういう黄効率の高い堆肥をやる。そのためには何回も何回も切り返しをする。そうすると手に取つて頬張りしてもいいような堆肥が出来て来る。そのことの喜びということを出来る農家、これが大事なのですね。それをやつているが、最初はいい堆肥はなかなか出来ない。いい堆肥を作るためにはどうするか。あるいはどういう黄効率の高い堆肥をやる。そのためには何回も何回も切り返しをする。その急にはいい効率を取る。効率を取れば「パンフローナー」のワイヤーが壊れてしましますから、それを一年中エレベーターの最突端にしてくるといふ作業を黙々と何度も何度もやつきました。その急にはいい効率を取る。効率を取れば「パンフローナー」のワイヤーが壊れてしましますから、それを一年中エレベーターの最突端に入が立つて、敷藁を入手で取つて上げる。周りの農家は、敷藁を敷くからそんなことをしなければならないのだと言うのですが、そんな無意味と思えるような農作業を僕は随分して来ました。

○ 拡大の問題点

草地が五〇戸になつた時点で、木のない農場の哀れさを感じた。僕は入植したときに成るべく木を伐ろうと思っていた。全部草地にしたいと思いつ地も改良しました。ところが落ち着いて立ち止まつた時に、木のない農場の虚しさを知りました。

入植以来、団は計画的に防風林を植林しました。その時は、木など植えて仕様がないのになつて思つていました。木なんて大きくなつてきた姿を見たときに、やはり僕も木を植えようと思つた。僕は今でも覚えています。それが一〇年経つて、かなり大きな防風林になつた姿を見たときに、やはり僕も木を植えようと思つた。僕は今、草地の一五戻くらい植えています。が、春農・農業における植林というのも大事なことだと思います。木は、やはり成長が遅い。



▲パンクリーナのワイパー
掲除をする三友さん

草地として使つた方が効率がいいという時代でしたが、木を植えることができて一〇年経ち、かなり大きな木に育つきました。農業の速度は、酪農法の急速な発展とは逆に木の成長くらいの速度がないのかなと思います。それは物理的な成長ではなく、木は、日々大きくなっていることは分からぬが、振り返ると間違いない大きくなっているのを見る」ことができる。農業も目に見えるほどには大きくならないだけが、振り返って見れば成長している。そういう速度が、農業の発展の速度かなと思います。

農業の規模が大きくなることが発展だとは思わない。今はゴールなき拡大といわれているのですが、実は、五五年のそれそれ個々の酪農家の草地を基盤とした適正な規模を超えて拡大をしているからゴールがないのであって、酪農家の基本的なゴールは草地に相応しい拡大が終わつた昭和五五年くらいの規模、これがゴールだつた。マロンに驚えるとゴールを超えちゃつたからゴールがないのです。ゴールを目指すのがたら戻るしかないのです。

ゴールなき拡大ではなくて、ゴールを越した拡大という方が正しいと思います。

●分岐点

「ゴールを越して来て昭和五五年から平成一年くらいまで（特に昭和六〇年代）、これは、日本の戦後の酪農にとって最大の良い時代だったと思います。「これほど良い時代は一度来ないだらうと思いまや。いわゆる「ゴールドエイジ」だつたと思います。この昭和六〇年代に僕は講演で、「さう」と歴史的にみて昭和六〇年代は酪農にとって黄金の時代だ」と書つたのです。そうすると反対・反発を食らいました。「もっと良い時代が来るはあだ。僕は、苦しい」と、言うのですね。酪農家は常に苦しい説ですから。良い時代にひょうじ經營の充実をしたかといふことが今の大きなわかれ道になつています。

酪農家は今、何を考えているかというと、「ゴールに戻つて行こうか、あるいは立ち止まるべきか、あるいは自由化に備えて更なる拡大するか、この三つの方向をそれぞれ探つてゐる。この平成七年は、大きな分岐点になつていて、その分岐点になつていています。それは国にとっても農家にとっても大きな分岐点になつていています。多くの農家はそれを息をひそめて、これからどういう方向に行こうかと考えています。しかし、国は新農政の中でスーパー・資金とか認定農家制度を作つて、基本的に拡大する方向に持つていて」としているのです。

草地として使つた方が効率がいいという時代でしたが、木を植えることができて一〇年経ち、かなり大きな木に育つきました。農業の速度は、酪農法の急速な発展とは逆に木の成長くらいの速度がないのかなと思います。それは物理的な成長ではなく、木は、日々大きくなっていることは分からぬが、振り返ると間違いない大きくなっているのを見る」ことができる。農業も目に見えるほどには大きくならないだけが、振り返って見れば成長している。そういう速度が、農業の発展の速度かなと思います。

農業の規模が大きくなることが発展だとは思わない。今はゴールなき拡大といわれているのですが、実は、五五年のそれそれ個々の酪農家の草地を基盤とした適正な規模を超えて拡大をしているからゴールがないのであって、酪農家の基本的なゴールは草地に相応しい拡大が終わつた昭和五五年くらいの規模、これがゴールだつた。マロンに驚えるとゴールを超えちゃつたからゴールがないのです。ゴールを目指すのがたら戻るしかないのです。

ゴールなき拡大ではなくて、ゴールを越した拡大という方が正しいと思います。

この流れは基本的に変わらない。

今年はスーパー・レーン出でいるのですが、非常に需要が多いのですね。何故かというと、年に亘る生産調整の中で酪農はいろいろな部分で辛抱しています。そこへ実際に巧妙に、というかタイミングよくスーパー・レーンが入つてきました。そしてこれは何にでも使える。認定農家になれば中古のトラクターでも、ちょっとした増改築にも使えます。ところが、当然スーパー・レーンは認定農家制度の中で五カ年計画なり中長期の計画を立てますから、そうすると中長期の計画のなかの中古のトラクターという位置付けになります。農家は一年生産調整したなかで我慢したから、ただ中古のトラクターを買いたいのです。ただそれだけです。

ところが中長期の計画を立てて、そのなかで中古のトラクターという計画を作れば、基本的に規模拡大に引っ張られてしまう。間違いないと引っ張られてしまう。僕はこれが一番怖いなと思います。新農政は何でもいいと、そして、手挙げ方式に変わりました。手を挙ければ北海道の場合は誰でも認定される。九八%くらい認定される。そして、拡大だけでなく経営を改善すればいいという方向を示して、道のガイドボストンでも四〇頭、八〇頭、あるいは法人といふメニューを揃えては来ましたが、基本的に拡大という方向になつてゐる。僕は、新農政はちょっと危険かなと思うのです。

生産者から第三期の生産計画をとると、半分の人が、現状維持、縮小、ノータイアになつていています。四八%くらいが規模拡大を目的とする現状です。そして、今、立ち止まつうといふ人が半分くらいいるということは、これは前回の調査で、殆どの人が規模拡大を目指してきたことからみると、非常に様変わりしたことになります。規模拡大を希望しているおおかたの人々が、現在の収支が合わないということです。現在の収支が合つあおかたの人が立ち止まろうとしているのです。ですから新農政は現在の収支が合わない人を拡大させるということになつていて。拡大しても決して「コストが下がらませんから、自由化にも太刀打ち出来ない」ということになります。

今、分岐点に立つてゐるから、あつちこつちから僕みたいな人間がよばれる。そして、彼らが言うのは、「どうしようか? これからどうしのいいか?」です。

新しい二〇〇〇年に向けて、酪農家が立ち向かつていけるのは一つしかない。一つは借金のない酪農家。これは規模に関係ありません。負債がないということは、今後の自由化に対する酪農の強さ。もう一つは上手に経営ができる人で、規模拡大をしていける人。

(注) この表は、酪農学園大学・吉野宜彦講師(前・当研究所専任研究員)が、三友さんご本人からの聞き取り調査を基に作成したものです。なお、経済データは、組合員勘定報告書を主体に出荷乳量伝票、営農計画書などによります。研究会の資料として提示されたもの一部を転載しました。

負債残高 (万円)	農業収入 (収入)	うち乳代 (万円)	農業支出 (万円)	農業所得 (万円)	乳代所得 (万円)	元利償還 (万円)	可処分所得 (万円)	所得率 (%)
-	147	128	148	20	1	201	-181	13.5
-	328	324	242	104	100	18	85	31.6
-	448	402	354	123	77	29	94	27.4
696	521	446	327	235	161	55	181	45.2
-	718	486	423	324	92	74	250	45.1
-	722	678	542	230	187	229	1	31.9
-	1,136	738	608	632	234	187	446	55.6
-	1,117	885	719	499	267	197	302	44.7
1,272	1,225	1,036	846	462	273	195	266	37.7
2,256	1,260	1,067	1,073	298	104	259	39	23.6
-	2,010	1,342	1,193	984	317	371	613	49.0
-	2,104	1,424	1,364	922	242	390	532	43.8
<hr/>								
-	2,637	1,525	1,206	1,603	491	400	1,203	60.8
-	1,783	1,539	1,158	781	537	479	302	43.8
2,478	2,162	1,751	1,171	1,117	706	465	651	51.7
2,184	2,224	1,792	1,155	1,184	751	789	395	53.2
1,552	2,027	1,700	1,097	1,012	684	161	851	49.9
1,410	2,350	1,779	1,080	1,354	783	155	1,199	57.6
-	2,230	1,587	1,019	1,287	644	967	320	57.7
-	2,125	1,457	848	1,316	647	153	1,163	61.9
603	2,692	1,709	930	1,785	802	155	1,630	66.3
869	2,350	1,669	888	1,488	804	149	1,339	63.3
767	2,088	1,710	888	1,224	846	157	1,066	58.6

それ以外の人は時代と共に止めていかざるを得ないのかな、と思われます。

○農業生産力の向上

僕は、昭和五六六年から規模を拡大しなかつたのですが、資料をみていだきますと、これが僕の経験です。この経過が、酪農の歴史の経過に重なり合つから使いたいのです。僕の頭の中に入つている話をします。四〇頭搾乳で一六〇七、昭和五六年の経費ガ一、三〇〇万円くらいだったのですね。平成一、二、三年では三〇七搾つて経費が八〇〇万円くらい。

これが問題なんですね。乳量は同じでも経費が下がっていく。最初はいわゆる節約とかで経費が下がってきました。何故かといふと経費が下がつたのではなくて、僕の農場の生産力が向上した結果だという見方をして欲しい。今にして思えば無駄な経費を差し控えただから八〇〇万円になつたのではなくて、八〇〇万円しか掛けなかつたとしても二、三〇七の牛乳が搾れるようになつたということです。では、その生産力の向上は何かといふと、やはり士であり、草であり、牛なんですね。それもつと大きなことは、人間の労働の質の向上だと思うのですね。生産力の向上という部分を、今日、本当にしっかりとお話し出来ればいいな、と思って来たのです。

一般的の酪農家は生産量の拡大をしてきました。生産量の拡大が、生産力の向上だと思うのですね。生産量の拡大こそが酪農の安定につながると思つてきました。私も思つてきました。ところが生産量の拡大は、一〇〇七経営の人が四〇〇七になれば、少なくとも四倍も経営効率が良くなつていなければならぬんですね。しかし、ほとんどの人たちの中身は変わらないのですね。

●トータルバランス

乳代所得率というのを僕は考えましたが、一般的にいう農業所得率は個体販売プラス乳代から経費を差し引いたものを収入で割り返して出しますが、僕の言う所得率には個体販売を入れません。酪農というものは乳代で生活しようということです。個体販売といつの

三友盛行さんの酪農経営経過



年次	総頭数 (頭)	うち成牛 (頭)	経営面積 (ha)	出荷乳量 (t)	個体乳量 (kg)
1969	24	18	40	46	-
1970				80	4,463
1971				-	-
1972				94	-
1973				89	-
1974	↓	↓		-	-
1975	31	21		94	4,473
1976				97	-
1977				120	-
1978				116	-
1979				-	-
1980				154	-
1981			48	165	-
1982	↓	↓		166	-
1983	72	38		191	5,026
1984				192	5,053
1985				190	5,000
1986				201	5,289
1987		40		196	4,900
1988				187	4,675
1989				221	5,525
1990				214	5,350
1991	50	↓		225	5,625
1992	↓	↓			

は価格が高い時もあるし、よく多く売れる時もあり、まだその逆もあつて自分の経営指標の中では非常に捉えやすい性格があります。大事なことは乳代。乳代から経費を引くのですが、その経費の中から利息分を除くということです。經營にとって負債の負担は利息しかりませんから、経費から利息を除くということは、この人は借金ゼロの農家になるということですね。

仮に借金ゼロの農家にして、乳代所得率が10%の場合は、借金が無くても結果として負債が増えてしまいます。だから、借金を棚上げしても五年も経過すれば、まだ同じように借金が溜まつてしまふことになります。僕が酪農家として思うのは、少なくとも10%の乳代所得率が欲しいのです。この30%というのは通信簿の5点法で3にあたると書つことです。ちなみに50%くらいで借金がないう状態です。このような人は規模拡大しても構わない。

しかし、「10%の人が儲からないから」という理由で規模拡大しても、自分の牛乳一kg売る生産構造に問題がある訳ですから、その問題を引きずつて規模を拡大すれば、更に足を引っ張られるということがあります。そのことをキッチリとやらないとダメですね。

北海道の酪農家は、あかだつミカンを使っていますから100%つみカンを通したということであれば、誰もが自分と他人とを比べることが出来る。このことが大事です。

酪農家の二つの欠点は、①自分以外の経営収支を見ることが出来ないこと、②自分以外の搾乳をみると出来ないことです。基本的に、何處へ行っても、視察に出かけても、搾乳時間には必ず自分の牛舎に帰ります。これが大事です。

自分以外のものが見えないという閉鎖性、非発展性が酪農家を成長させない。そういう状態にありながら情報は洪水のよくなって入ってくる。その情報を取捨選択する訓練に欠けています。加えて人間は拡大という指向が強いので、「量の拡大」などを伴つくる情報には乗り易いといつて、大事なことが見えない割りには情報が入り過ぎていることが問題とも言えます。

最低でも乳代所得率30%はキープしなければなりませんが、それが20%にしかならない場合、無理な拡大による欠陥が生じています。粗飼料が足りないから無理な拡大にながつっているとも言えます。農業の生産力が不足しているのです。酪農で言う農業生産力は草を牛乳に替える生産力が育るか無いからのことです。

草は当然、土に替えられていますから太陽エネルギーをいかに効率よく土、草に替えていくかということです。



負債というものは経営とは基本的に関係ありません。二〇～四〇%の乳代所得率であつても負債が多すぎると单年度で返済のできない人に對して、はじめて長期・低利の資金があつてしかるべきなのであります。ところが二〇%の人に対しても、いかに長期・低利の資金を準備しても、それは単なる縁延べに過ぎず一時凌ぎの対症療法であつて經營本体を良くすることにはなりません。しかし、農協や酪農団体はいつの時代も長期・低利の資金を望んでいます。

そして自分たちの經營本質に対してきちんととした改善をしない。農協組織も量の拡大による恩恵を受けているし、量の拡大というのは農家に通り易い話であり、國の方針にも合致し全体として乗り易いといふことです。

出てきます。このマイナス要素をいかに小さく抑えるかが技術とともに言われています。今の酪農家はこの技術を習得することに一生懸命ですが、これは本当の意味での技術ではない。我々は量の拡大という「プラス」の部分にだけ目を奪われて、数字に表れないマイナス部部分に気づかないでいるために収支の足を引つ張られて、変動費だけでなく固定費でもマイナスが生じ、それはかり牛の疾病も増えてくるということです。

負債が多いから借金が減らない／＼規模拡大する／＼高濃乳をする。その結果、プラスとして間違いなく量を増やします。しかし、乳牛といつ反芻動物を餉つているということを忘れてしましました。

我々がなぜ乳牛といつ反芻動物を餉つているかと言えば、草を生

○適正規模

しかしながら、経営としての収支が合っているだけであつて、農場における農業収支が合っていることは別だと思うのです。自分の農場における農業収支が合つような農家を育成してほしいことは、そのことは地域、国の収支も合う訳ですから、「一〇〇億を超す人口が出現したときに地球の収支がきちんと合うことが必要だと思います。この収支を合わせるのはたゞただ地表の上と下、一〇〇億の世界です（深くても地底二〇〇kmまでの世界です）。

ところが我々は、地下数百kmの鉱物・化石エネルギーを使って収支を合わせておられるだけなのです。これは、財貨と同じですがから、一つの油が枯渇する。我々は次の世代の資源を使つて当面の収支を合わせておられるに過ぎません。農業というのは地表上下一〇〇kmの収支をどのように合わせるかです。僕のところは、借金がなくて、規模が小さいから儲かるのだと言われますが、そうではなくて、このたゞだから一〇〇億の世界の収支が合うということです。

なぜならば、一〇〇億の世界の住民が非常に働きやすい環境を作つてゐるところなのです。それは微生物であり昆虫であり空気です。配分を細かくすると確かに乳量は増えますが、逆にマイナス要素も

適正規模ということは非常に大事です。根拠で言えば一冊で
です。それは草としての量、あるいは糞尿を煙に還元するバランスで頭
からみて適正ということです。そのときに人の労働が伴うのですから
規模拡大の盲点は人の労働の質の低下を招くということです。
労働の質の低下は人の労働のようになるともたらすか。講演などに出かけ
て農家をみてやるのに機會がありますが、殆どの農家の畜舎に工
事がありません。特に若牛の前に工事がない。何故かと聞きますと
「エサはもつたない」と言います。エサは二〇〇㌘やつて腹一杯
と思つたほうがいいと思ひます。一刻くらい残るよう工サをやつ
て、その残つた二割が糞尿になり「パンフレーナー」に入り堆肥になつ
ていくのです。草は十分仕事をするのですから。特に若牛の前に草
がない、あつても食べづらい状態になつてゐるというのは若牛を失
業させてゐるのです。

適正規模を超えた酪農家は儲からないのは、自分のところの大事故
な構成員である牛を失業させているからなのです。働きない従業員

をだくさん抱えていませんかの当然儲けが出てこないのです。では、若干はこのよつた働きをするかと言えば、草を食べて大きくなる仕事をするのです。搾乳牛に十分な粗飼料を与える牛を失業状態に追いやつて、適正規模を超えた頭数、それが農作業の質を落とし、牛だけでなく、草も、土も、失業状態に追いやっています。

もちろんとした対処法をせず化成肥料だけで攻めていく、そして草地更新を単年化する。これは確かに草地としての収量は増えタンパク質の高い草は採れます、土地を攻撃しているに過ぎないと僕は思っています。草地は、なるべく長く使う。そのための維持管理をきちんとわかる」と。今の酪農家は、草地の維持管理の方法を知らない。国を挙げて知らないのです。

酪農は昭和二十九年の酪農振興法によつて、ある部分では人為的に突如として出来たものです。それを作り上げた流れは耕種農業の流れなのです。だから、草地といつものは天地返しをして更新するもので草地更新をしない農家は情農だといつことはつながつてゐるのですが、我々は酪農というものを、歴史的に撮まえてはいないのです。遊牧の民からずっと長い歴史を経てきた酪農ですが、我が国では「メ文化のような貧乏の時間を持たず、人丁的に突如出来上がったのですから、これについての対処方法が用意されていないのです。

そして、本来ならば自身一〇～二〇年も酪農を続けておればそれに相応しい酪農家になるはずですが、そうした酪農家に育つ暇がないほど毎年、毎年規模拡大を強いられてきた。だから二〇年も二〇年も続けてこようが、酪農業を営むことはできません。酪農家にはなれない。この、酪農家になれないことが、今日、最大の混迷の原因です。

● 加工業から農業へ

近代酪農は、基本的に加工業に過ぎない。僕が主張しているのは農業としての酪農をやらほしよう」ということです。農業としての酪農をするためには適正規模にしよう。おおかたの人は適正規模を超えていきますから結果として縮小といつことが出てきます。流行り言葉では「スリットですが縮小なのです。僕は「小さくする」とがいい「こんだ」とは一貫で留つていてません。「適正規模にしよう」と書いています。

縮小すれば当然乳量が減りますから「負債が返せるのか?」と問

われますが、負債が返せないが為に大きくなり過ぎている説です。から適正規模にして返していくほうがいいかなと僕は思うのです。

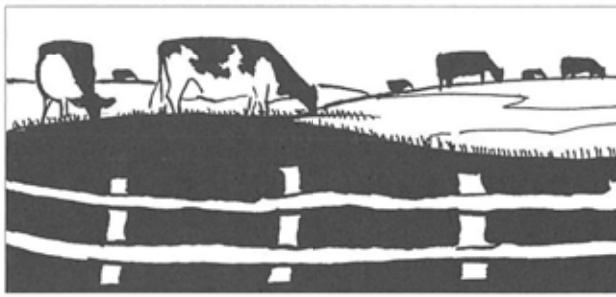
酪農は、いろいろなやり方があるようと言われるが、実は一つしかないというのが僕の立場です。結局は「だくさん牛乳搾る」ということに收敛する。そして、だくさん搾る算書を背中に負つて毎日、毎日がんばつてやっているというだけです。僕が言いたいのは、酪農はその一つしかないが、その中でそれが創意工夫をしながらいろいろなやり方があつたまうがいい。でも現実は、いろいろなやり方があると言ひながら方向性はただ一つ「牛乳をだくさん搾る」です。それは、農政の食料供給の目的だからです。

一方、酪農家は決して食料供給を目的にはしていないのです。僕が入植して切实に恵つたように、乾いた薪がほしいことや、牛に腹一杯食わせたい」と、そのことで家族を健全に支えていくといつことだけなのです。決して決して、日本の食料自給率を高めたい等といつた大きな世界を我々は持つていないので。たどひだらの自分と自分の家族を守りたい。そのため酪農をやつていてるに過ぎないので。

ところが今は、戦後の食料難を経て食料をいかに自給する力が課題でした。この自給は、国内での自給にはつまり、時代を越えて国外から入ってきてても構わない、これからは八〇%も九〇%もが国外からのものであつても、国民に食料が供給されるのであればそれなりに農政は機能しだらうことになるのでしょうか。

加工業としての牛乳と、酪農としての牛乳を、農政の面からお話ししますが、一液の牛乳の中に一種類入つてると考えます。一つは殆どを占める加工的牛乳であり、もう一つは草を乳に替える農業としての牛乳です。国の農政はこの加工的な牛乳と農業としての牛乳の比率は問題にしていません。要是一液の牛乳がより多くあればいいのです。しかし、酪農家の生き方や經營から考えるとなるべく農業としての牛乳が多く、加工的部分が少ないほうがいいのです。換言しますと、国は名目牛乳の量を求めているが、酪農家は草を牛乳に替える実質牛乳の割合を同じ一液の中でもいかに増やしていくかが大事なのです。そのことが農業生産力の向上なのです。農家にとって加工的な部分の生産を増やすことも決して悪いことではありませんが、ある一定量まで到達した後は、実質部分の比率を高めていくことが酪農の発展だと思いります。

僕の地域で、出荷乳量の一番多い人が一、〇〇〇tで一番少ない人が一〇〇tですが、そのどの辺の農家も所詮五人くらいの家族を



養うのが精一杯です。とすれば一〇〇戸で同じ五人家族を養う方が一、〇〇〇戸搾るよりはる方に効率が高い。農業生産力が高いということです。逆に言えば、一、〇〇〇戸も搾らなければ家族を養えないということは非常に効率が悪い説です。農政にとっての効率がないということです。

一方、地域社会にとっては一戸で一、〇〇〇戸も搾る農家というのは、一〇〇戸搾る農家五〇戸が五戸だけで済むということですから効率が悪いのです。同じ面積に僅か五戸しか養えない地域の貧しさに比べてみた時、五〇戸養える農力さは歴然としてきます。

牛乳の種類を別の分類をしますと、白、赤、黒の三色です。今は赤字の牛乳が圧倒的に多い。次いでアメリカの土と日本の土を牛乳に変えているだけの黒い牛乳が多い。我々は本来、地域も滅らない人も滅らない、土も衰退しない本当に白い牛乳を作るべきです。

僕が心配するのは、加工業というものは量の拡大による弊害だけなく、それに携わる人々の人生でも奪っていくことです。僕を含めてですが、それは一日一日の加重な労働時間に現れます。例えば僕は、入植して最初の子供が三歳三歩きの一、二年は桜を見に行きスズランを狩りに行きましたが、その後一〇年ほどは、桜というものを見たことがありませんでした。樹がいつ咲き、いつ散っていくのか。スズランがいつ咲くのかも忘れてしましました。我が家の前、五百メートルの道路を超えた防風林へ行けば必ずスズランが咲いているのですが、僕には一〇年以上もその道路を超えるという心の余裕がなかつたのです。同じように現在も一〇年、一〇年以上 sakura もスズランも見ださないが豊かな農家が数多いことは確かだと思います。

そして加工というのは、配合飼料とか生産資材の量を増やしてもそれが通過する時には、あだかも風が吹いた後に一人一人の体温を奪っていくよう、これに参加する人間の、牛の、土、草の体力も奪っていきます。

加工業から農業に戻つて、農業生産力を高めていくことが大事だと思います。

○ 自主自営の酪農

将来、日本の酪農をどのように進めていくかですが、基本的に自主自営の農家をつくりあげていくことです。経済的にいえば借金のない農家が一番強いと思います。そして、専業である必要はないと思

思います。根釘のような専業地帯に大規模經營はあり得ないはずであります。仮にそのように思い込んでいる人がいるとすれば、それは大きな誤解です。何故ならば、専業酪農家はそれに相応しい大きなバツツグランツを持つているのです。一〇〇頭以上の牛を飼っている人は、周辺に自分の畠ではなくても一〇〇haくらいの小麦畠を持つていているということで初めてその大規模の可能性があります。

現実の専業地帯は、隣も、その隣もみんな酪農專業ですか、自分のところの過剰な貢献を隣に分けることが出来ないです。したがつて専業地帯は、適正規模（この場合、大、中、小の様々な形態）の酪農家が集約されている姿だと思います。

自由化に備えるためには、量を拡大して「コストを下げるのではなく、健全な酪農家をつくるほし」ということを望んでいます。そして、健全な酪農家をつくる最大のことは乳価です。それは価格が幾らでなければならないといったものではなく、酪農家が経営をして、生活できる乳価を国民が理解し支持していくことです。国際化というのは、単なる価格の比較ではないと思います。

内なる国際化で言えば、日本の国の中ではないといふことは、そこに部分の負担をしていくことです。いいいは、適正な価段と適正な生産方法と適正な量によって保たれるのですから、それをみんなが充分に分かち合うことのできる国が、豊かな国だと思うのです。

● むすびに 一三

入植して六年になりますが、ようやく一人前の農家になれたのかなあと思います。一方で、同期に入植した農家の一男、三男や移転入植してきた農家は段々農家でなくなってきたのかなとも思っています。それは、立ち止まるか、立ち止まらないかの違いだと思います。僕は今、酪農家として一番大事なことは立ち止まる

今まで、常に前へ前へと進んできましたから、立ち止まつて、本当に自分の意思でこれから数年先を見極めた上で歩いていこうと立ちはだかりません。そして、立ちはだかる限りモノは見えません。そして、本当の農民になつていくことが、自由化にも強い健全な国をつくるいく一助になるのかなあと考えています。

オウム真理教騒動の背景

北海道立中央農業試験場

経営部長 長尾 正克

の「終末思想」ではなかろうか。

信したのである。

平成七年三月二〇日に発生した地下鉄サリン事件から急展開をみせたオウム真理教騒動は、最後と思われるすさまじいのうちを見せつても、ようやく収束段階を迎えるようとしている。

連日、テレビのニュースや特別報道番組を見ているうちに、教団幹部のふてぶてしい表情とは別に、警察の手入れを写真に撮つて必死に抵抗している一般の婦人信者の姿に、一種のやりきれない思いを抱いた。何が彼女をオウム真理教に引きつけたのであろうか。

ひょっとしたら、人類の運命は、もうそれ程長くはないのではないかという「終末思想」にも似た不安感は、実は私も日頃から抱いていたのである。

そのような不安感がいつまのからだつたかは定かでないが、その端緒は、ローマクラフの報告書にあつた「人口爆発」による「食糧危機」ではなかつたかと思う。

いつの時代でも新興宗教が活性化するのは、時代の不安を反映しているためであろうが、現代の新興宗教に共通しているのは、一種

シユマツハ一博士の著書の内容を端的に紹介すると、西欧近代化思想の根幹である「巨大主義」と「物質主義」への全面挑戦であり、経済成長と物質崇拜のぬき難い信仰によって人類社会が大きく歪められている今日、力子では買えない非物質的価値を尊重する美と、健康と調和の新しい人間生活を復興させるのが将来に対する旧い世代の義務であるとして、「脱近代化」への「バータイ」転換を説いている。

彼の主張によれば、このまま人類社会が高度経済成長路線、つまり近代化路線を踏襲し続けると、人口増加による食糧や生活資材の増産、あるいは燃料確保のため森林伐採が進行することと、工業生

産のための化石エネルギーの消費が増大することによつて、炭酸ガスによる温室効果と酸性雨などにより生態系に対し大きな負荷を与えることになる。その結果、地球環境は著しく汚染され、究極的には人類そのものの生存が脅かされると警告しているのである。

つまり、化石エネルギーは、人間に由つて作られる物ではなく、再生できない物である。われわれを取り巻く自然によつて代表されるこのようないくつかの資源を浪費するならば、人間の生命そのものを脅かすことになるということである。代替エネルギーとして原子力エネルギーがあるではないかという意見もあるが、原子力エネルギーは無害になるまで二万五千年も地下に埋めて、厳密に密閉しなければならない廃棄物を今や人類は持て余している。

化石エネルギーの在庫は、やはや一世紀間も持たないうわに及ぶようじつしているのである。

★ ★ ★

カット・ウルグアイ・ラウン合意では、経済専門家による次のような自由貿易による国際分業論によつて、農産物市場の解放路線に踏み出した。曰く「世界の異なる諸地域は、天候の相違、土地の性質、労働力のコストなどによつて、特定の生産にそれぞれ異なつた強みを持つている。すべての国はそれぞれ最も高度に生産的な農業経営に生産を集中することができるような分業によつて、利益を受けるであろう。この結果、農業所得が高ければ高いほど、全経済、特に、産業のコストは低くなる。したがつて、農業の保護主義を正当化する基本的な理由など」にもない」という理屈である。

この論理は、工業の論理をそのまま農業に当てはめただけの論理である。そこには農業にはつきもの豊凶変動や有機物循環による地力維持の必要性など、一切考慮されていない。

農産物の自由化を高く叫んだ財界やマスコミが言つよう、「カネがあれば『食糧』は手頃な價段でいつでも買える」という論理を、われわれは素直に信じてよいものであろうか。

★ ★ ★

それまでは、世界の穀物需給は短期的には過剰基調、中長期的には人口伸び率、資源および環境的な条件を重視してゆるやかに逼迫するというのが我が国の農水省も含め、国際関係機関の定説になつていた。但し、その不確定擾乱要因として中国の人口増と経済成長が挙げられてはいた。その不確定要因が動きはじめたのである。

昨年、レスター氏が来日したときの記者会見によれば、「経済成長が著しい中国は、間もなく史上例のない規模で食糧輸入を始め、世界最大の食糧輸入国である日本を脅かす」となるべく警告した。

その根拠として「中国政府は、国民一人当たりの卵の供給量を西暦1900年には現在の一倍の100個に想定している。この需要

は中國内の生産だけでは到底賄えない。当然、世界のマーケットで購入せざるを得なくなる。しかも、これだけの卵を生産する100個の飼育には、オーストラリアの全

輸出量を上回る穀物が必要になる。この場合、一つの問題がある。一つは中国に海外から食糧を買える資金があるかどうかという点、二つには中国に食糧を供給する国はどうかという問題だ。第一の問題の答えは「イエス」である。

深刻なのは二つ目の問題だ。世界の食糧生産高は、八〇年代を境に伸び率が鈍化してきた。一〇三〇年までを予測すると、ベストの

状態でも1100万トン程度しか増えない。せいぜい年平均900万トンの増加がやっとという状態にある。牛肉、羊肉、漁獲高は九年の水準にとどまる見通しだ。

その結果、世界全体の食糧生産高は約11億トンであり、その時点での世界人口を八九億人と考えても、これではあまりにも食糧が少なすぎる」と述べている。

食糧生産が鈍つてきた理由は、「これまで穀物増産の原動力であつた化学肥料や農薬の効果が限界に達した」と、農地の土壤流亡、水不足、気候の温暖化といった環境問題、さらに工業用地や住宅用地への転用による農地の減少が考えられる。なにかも水不足はアメリカ西部、インディアナ州やアラバマ州、中国北部などで深刻化している。これから二十一世紀にかけて、世界の食糧生産は高い伸びが期待できない。そうしたなかで、中国が大量輸入すれば、そのしわ寄せを受けるのはアフリカなどの途上国になる。これらの国は穀物相場が高騰すればするほど買付け量

を減らさざるを得なくなり、食糧暴動や大量の難民が発生する恐れがある」と警告した。

レスター氏の予測通り、中国は今まで対日輸出をしていたトウモロコシを昨年一二月に輸出禁止に踏み切つただけでなく、アメリカから100万トン輸入する」とになった。今年の三月には、大豆の対日輸出停止に踏み切つて小麦ばかりでなく米までも輸入はじめている。

★ ★ ★

将来の人口増に対応して、世界の食糧生産は伸びないことがわかつたが、その理由は何であるか。人類は地球のすべての資源を人類のためだけに利用する工業技術をつくりあげ、地球のいたるところで圧倒的パワーを駆使している。このため、地球自身と生物圏とが何十億年間の共同作業で形成してきた代替のきかない貴重な自然資

長尾 正克（ながお まさかつ）さん

1940年室蘭市生まれ。北海道大学農学部卒。

1986年北海道立農業試験場経営科長。

1989年同経営部主任研究員。

1991年より現職。当研究所常任幹事。

農学博士。

源、つまり食糧生産の資本となる地球環境が劣化していくことにあるのはなかろうか。それは、次のような兆候からも明らかである。

一つは、化石エネルギーの燃焼による炭酸ガスの増加がもたらす地球気候の温暖化（温室効果）である。

一つには、これも主として化石エネルギーの燃焼による酸性雨の広がりがもたらす、森林の枯渇や湖沼の汚染である。森林の枯渇は、水資源の枯渇をもたらし、干ばつや洪水の危険度を高める。湖沼の死海化は、回遊魚の帰還を妨げる。

二つには、フロンガスによるオゾン層の破壊がもたらす有害紫外線の増加である。

四つには、過度の灌漑、耕作、放牧による優良農地の減少である。

五つには、過度の森林伐採である。特に、熱帯雨林の伐採は、気象変化による農業への影響だけでなく、漁業や野生動植物の生態系に甚大な被害を与える、熱帯雨林の再生を妨げている。

このまま食糧生産の資本となる地球環境が劣化していくことにあるのはなかろうか。それは、次のような兆候からも明らかである。

一つは、化石エネルギーの燃焼による炭酸ガスの増加がもたらす地球気候の温暖化（温室効果）である。

一つには、これも主として化石エネルギーの燃焼による酸性雨の広がりがもたらす、森林の枯渇や湖沼の汚染である。森林の枯渇は、水資源の枯渇をもたらし、干ばつや洪水の危険度を高める。湖沼の死海化は、回遊魚の帰還を妨げる。

二つには、フロンガスによるオゾン層の破壊がもたらす有害紫外線の増加である。

四つには、過度の灌漑、耕作、放牧による優良農地の減少である。

五つには、過度の森林伐採である。特に、熱帯雨林の伐採は、気象変化による農業への影響だけでなく、漁業や野生動植物の生態系に甚大な被害を与える、熱帯雨林の再生を妨げている。

この中で最も影響が深刻で解決が困難な問題は、地球機構の温暖化である。化石エネルギーの使用により、毎年100億トンの炭酸ガスが生じ、その半分は大気に残っている。

地球機構の温暖化により、異常気象による干ばつと洪水はその頻度を、今後益々増加すると予測されているのである。

このまま推移すれば、人類の末来は真っ暗である。

そのような危機意識をわれわれ大衆は、本能的に抱いているのはなかろうか。そして自分だけ、さらには日本だけでも、その危機を開することの難しさを、われわれ大衆は悟っているのはなかろうか。何故なら我が国だけ自然環境を守るうとしても、中国大陸からの貿易風で運ばれてくる汚染物質の降下からもたらされる、悪

影響を防ぐ手立てがないからである。

中国の原発が、チエルノブイリ級の事故を起こしたならば、我が

国全土の汚染は免れ得ないからである。

中国の化石エネルギーは、

七十パーセント近くが石炭である

から、酸性雨の危険も充分あり得る。

ここで改めて言いだしことは、札幌大学の岩崎徹先生がこの「ラム」で主張されたことの繰り返しになるが、地球に優しい産業構造を、すなわち、地球に礼儀正しい農業と工業の再生を繰り返し主張したい。

このまま推移すれば、人類の末来は真っ暗である。

このまま推移すれば、人類の末来は真っ暗である。

そのような危機意識をわれわれ大衆は、本能的に抱いているので

はなかろうか。そして自分だけ、

さらには日本だけでも、その危機

を開することの難しさを、われ

われ大衆は悟っているのはなか

ろうか。何故なら我が国だけ自然

環境を守るうとしても、中國大陸

からの貿易風で運ばれてくる汚染

物質の降下からもたらされる、悪

い。

國中を禍々しい騒動に巻き込ん

だ才ウム眞理教事件は、間もなく

それなりの収束を迎えるであろう

が、地球環境再生へ向けた人類の道のりは、容易ならざるものであ

ろうことは想像に難くない。

掲示板

研修会等への 講師派遣

(平成七年二月～三月)

○平成六年度農業委員等地区別研修会

主催 北海道農業会議
とき 平成七年二月九日(羽幌)

テーマ 「新たな環境に立った地域農業・経営の展開方向」

講演者 七戸 長生(当研究所・所長)

○JA智恵文冬期農業講座
主催 JA智恵文
とき 平成七年二月一四日

テーマ 「地域農業活性化の課題と方向について」

とき 平成七年二月二二日
北緯45度の条件を活かした複合

講演者 畠田 義昭(当研究所・常務理事)

○北海道トラック協会・農産部会
研修会 とき 平成七年二月一六日

テーマ 「道産移出農産物の輸送の実態と課題」

講演者 萩間 昇(北海道立中央農業試験場・流通經濟科長)

○北海道生産連会研修会
主催 北海道生産連会
とき 平成七年二月一八日

テーマ 「系統組織における生産技術指導体制の現状と課題」

講演者 田渕 直子(当研究所・嘱託研究員)

○平成六年度グリーンサークル
推進事業活動
主催 清里町フライズフーフ・清里地区農業改良普及センター

テーマ 「知内町農業青年フロンティア
事業研修会」

主催 知内町・知内町農業委員会
とき 平成七年二月一四日

テーマ 「知内町農業の将来方向」

講演者 七戸 長生(当研究所・所長)

○JA智恵文冬期農業講座
主催 JA智恵文
とき 平成七年二月二二日

テーマ 「地域農業活性化の課題と方向について」

とき 平成七年二月二二日

○地域農業技術センター連絡会議・

講演者 畠田 義昭(当研究所・常務理事)

●基調講演・「粗作農業の課題と展望について」
(清里町農業講座と交流)

●意見交換会・「今後の大規模畑作経営のあり方」
(当研究所・常務理事)

●講演および助言者 畠田 義昭
(当研究所・常務理事)

○清水町農業経営者懇話会21・設立総会記念講演会
主催 清水町農業経営者懇話会
とき 平成七年二月二二日

テーマ 「「(J)」が問題! 清水町の農業」
設立準備委員会

講演者 吉野 宣彦(当研究所・専任研究員)

○知内町農業青年フロンティア
事業研修会

主催 知内町・知内町農業委員会
とき 平成七年二月一七日

○南富良野町農業講座
主催 南富良野町
とき 平成七年二月一七日

テーマ 「野菜の产地形成の課題と取り組みの方法」
一農業生産に見る光りと影、持続的農業と発展の方向

講演者 七戸 長生(当研究所・所長)

○地域農業技術センター連絡会議・

研究交流会講演
主催 地域農業技術センター連絡会議
とき 平成七年三月二〇日

●「生産地消費」の拡大は、地域活性化のキーワード
一地域を見つめて楽しむ「ワトお」

●講演者 田畠 弘子(「ワープおつあらわしひき」生活文化研究所・所長)

○蘭越町地域活性化講座
主催 蘭越町
とき 平成七年三月二〇日

●講演者 七戸 長生(当研究所・常務理事)

●「生産地消費」の拡大は、地域活性化のキーワード
一地域を見つめて楽しむ「ワトお」

○南富良野町農業講座
主催 南富良野町
とき 平成七年三月二〇日

●講演者 七戸 長生(当研究所・所長)

●「野菜の产地形成の課題と取り組みの方法」
一農業生産に見る光りと影、持続的農業と発展の方向

講演者 七戸 長生(当研究所・所長)

●地域農業技術センター連絡会議・

●「生産地消費」の拡大は、地域活性化のキーワード
一地域を見つめて楽しむ「ワトお」

お知らせ

当研究所・第五回通常総会の開催

日時・平成5年5月31日㈭

午後1時30分

場所・共済ビル7階 飛鳥の間

(札幌市中央区北4条西1丁目)

総会終了後、記念講演を予定しております。

演題・「輸入自由化と地域農業」

講師・立正大学経済学部教授

(前・東京大学教授)

森島 賢氏

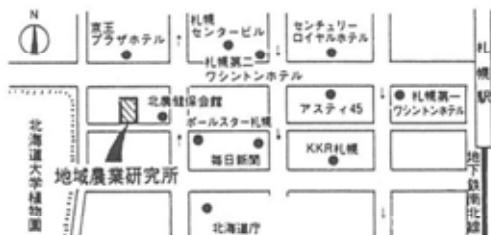
事務所の移転

5月1日から下記の新事務所で業務に取り組んであります。

(郵便番号060)

札幌市中央区北4条西7丁目
北海道厚生連 別館5階

TEL(011)281-2566
FAX(011)281-2707



DATA FILE

関連事項/DATA

北海道大学農学部

〒060 札幌市北区北9条西9丁目

☎011(716)2111

豊富町役場

〒098-41天塩郡豊富町字上サロベツ2542-2

☎0162(82)1001

美瑛町役場

〒071-02上川郡美瑛町本町4丁目6-1

☎0166(92)1111

中標津町農業協同組合

〒086-11標津郡中標津町東7線南2丁目1番地

☎0157(2)3275

北海道立中央農業試験場

〒069-13夕張郡長沼町東6線北15号

☎01238(9)2001

地域や大地にしつかりと足場を固めて、その上で示される事実は迫力に溢れ、強い感動を呼び覚ます。農作業が多忙を極める中、ご執筆の労を煩わした皆さんに厚くお礼を申し上げます。

○同時に、それぞれで「農」のツツワーフが様々に形づくられており、遅しくもじろじろ豊かな農業者が全国各地に多数おられることをあらためて実感させられました。

●エッセイで田中さんには、「アジル農業・農協の最新事情を。」三友さんのご講演からは、触発される多くの事柄がありました。

本号から「ときの話題」を「執筆いたぐ長尾さんもふくめて、ご協力に深謝いたします。

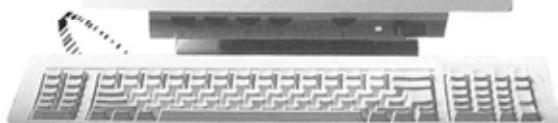
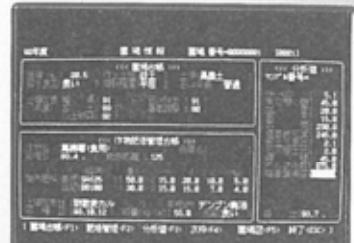
●本号の特集は、北海道の名地で遅しく「農」と向き合い、「この豊かに生活に勤しんであられる五人の方に、それぞれの経営や生活の実体験を通じたご提言を披瀝していただきました。

○冷たい逆風が「農」の行く手に立ちはだかっている」とも、確かに事実ですが、スクリムをしつかり組み合つことで展望が開けると思われてもきますが、いかがお感じでしょうか…。(K.T.)

圃場情報管理システム

施肥設計シミュレーター

土壤分析値データベース



コンピューターコンサルタント

コンピューターシステムの導入計画

土壤分析計とのオンラインデータベース

その他 各種委託プログラムの開発

ISC

Information system consultant CO.,LT

株情報システムコンサルタント

札幌市白石区南郷通19丁目北1-31 豊川ビル3F

☎(011)865-8272 FAX (011)865-6596



活力ある明日 の農業・農村を拓くため

農地の効率利用を促進する 農地保有合理化促進事業

この事業は、農地を買入・借入れし、集団化や開発造成を行って、規模を拡大したい方や新規就農者に売り渡し・貸付を行うものです。

(財) 北海道農業開発公社

060 札幌市中央区北5条西6丁目 農地開発センター内
TEL 011(271)2231